

平安京左京三条四坊十五町
烏丸御池遺跡

—麩屋町の調査—

2015年

古代文化調査会

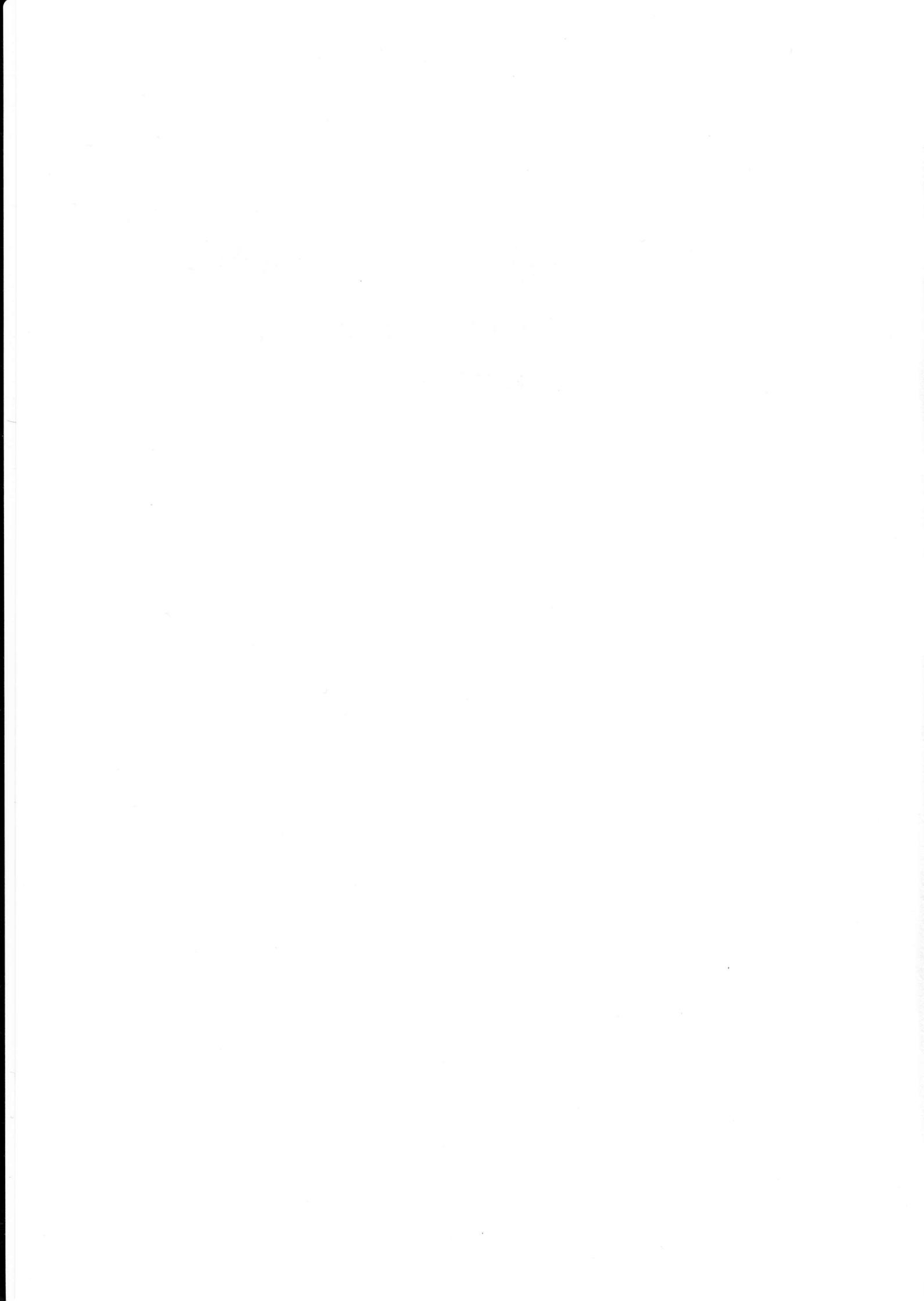


平安京左京三条四坊十五町
烏丸御池遺跡

—麩屋町の調査—

2015年

古代文化調査会



例 言

1. 本書は、古代文化調査会が京都市中京区麩屋町通御池上る上白山町において、積水ハウス株式会社によるマンション建設に伴い実施した平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡（14H380）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、積水ハウス株式会社より委託を受けた古代文化調査会の水谷明子が担当し、家崎孝治が補佐した。
3. 調査にあたっては、京都市文化市民局文化財保護課の指導を受けた。
4. 本書の編集・執筆は水谷がおこなった。
5. 図面及び遺物整理、製図トレースは水谷が、遺物実測は板谷桃代が担当した。
6. 本書で使用した方位及び座標の数値は世界測地系（新測地系）平面直角座標系Ⅵによる。
7. 本書で使用した地図は、京都市都市計画局発行の2,500分の1の地図（御所・三条大橋）、国土地理院発行の25,000分の1の地図（京都北部）を調整し、使用した。
8. 土壌及び土器・瓦類の色調の表記は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
9. 遺構番号は実測図・写真ともに共通している。
10. 発掘調査及び遺物整理に際して、下記の方々の御指導・御協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。（所属・敬称略、五十音順）

赤松佳奈 家原圭太 馬瀬智光 奥井智子 梶川敏夫 熊井亮介 熊谷舞子 黒須亜希子
佐々木信夫 鈴木久史 須藤晴彦 西森正晃 新田和央 長谷川行孝 平尾政幸
堀 大輔 宮原健吾

（株）明輝建設 （株）大高建設 （公財）京都市埋蔵文化財研究所 （株）熊谷組
スタイルプラン （株）積水ハウス （株）

本文目次

平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡

I	調査の経緯	1
II	遺構	5
III	遺物	14
IV	まとめ	27

図版目次

図版 1	遺跡	1	第 1 面全景 (南西から)
		2	第 2 面全景 (南西から)
図版 2	遺跡	1	第 3 面全景 (南西から)
		2	第 4 面全景 (南西から)
図版 3	遺跡	1	第 1 面調査区南西部 (南西から)
		2	溝29 (北西から)
		3	土壙43 (西から)
		4	土壙39 (北西から)
		5	建物基礎142と温石出土状況 (北から)
図版 4	遺跡	1	第 2 面調査区南東部 (南西から)
		2	土壙130 (東から)
		3	土壙176骨出土状況 (西から)
		4	堀175 (東から)
		5	井戸56 (東から)
図版 5	遺跡	1	土壙299・213 (南から)
		2	土壙270 (南から)
		3	柱穴358 (東から)
		4	柱穴458 (東から)
		5	柱穴378 (南から)

6 土壙369 (南から)

7 溝480 (北東から)

8 池473 (北西から)

図版6 遺物 池473・土壙369・447・270・300・177・299出土遺物

図版7 遺物 土壙213・244・堀175・土壙43出土遺物

図版8 遺物 土壙232・426・337・328・287・165・井戸94出土遺物

図版9 遺物 土壙39・整地層②・整地層③・土壙300・井戸47・土壙125出土遺物

図版10 遺物 溝29・建物基礎142・土壙150・26・井戸20・土壙130・40・整地層②出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査地点位置図	1
図2	調査地位置図	2
図3	平安京条坊と調査地位置図	2
図4	四行八門と調査位置関係図	2
図5	北壁断面実測図	4
図6	西壁断面実測図	6
図7	第1・2面遺構実測図	7
図8	第3・4面遺構実測図	8
図9	土壙369実測図	10
図10	土壙447断面実測図	10
図11	土壙125実測図	10
図12	土壙177実測図	10
図13	土壙299・213実測図	10
図14	土壙244実測図	10
図15	井戸56実測図	11
図16	土壙130実測図	11
図17	土壙176実測図	11
図18	土壙39実測図	11
図19	土壙168実測図	13
図20	土壙43実測図	13
図21	池473出土遺物実測図	15
図22	溝480出土遺物実測図	15
図23	土壙369出土遺物実測図	15

図24	土壙447出土遺物実測図	16
図25	土壙270出土遺物実測図	16
図26	土壙300出土遺物実測図	16
図27	土壙177出土遺物実測図	16
図28	土壙299出土遺物実測図	17
図29	土壙213出土遺物実測図	17
図30	土壙244出土遺物実測図	17
図31	井戸56出土遺物実測図	19
図32	土壙130出土遺物実測図	19
図33	堀175出土遺物実測図	20
図34	土壙43出土遺物実測図	21
図35	軒瓦拓影・実測図	22
図36	瓦質温石実測図	25
図37	石製品実測図	25
図38	土製品実測図	26
図39	金属製品実測図	26
図40	錢貨拓影図	26

平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡

I 調査の経緯

調査に至る経緯

調査地は京都市中京区麩屋町通御池上る上白山町259他である。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地・平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡にあたる。2014年4月、当地に積水ハウス株式会社によるマンション建設の計画がなされ工事に先立ち京都市文化財保護課が試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下1.1mにおいて室町時代後期の遺構が良好な状態で遺存していることが判明し、発掘調査の必要性が考慮されるに至った。京都市の指導の下、当調査会と施主との協議の結果、当調査会が発掘調査をおこなうこととなった。調査は2014年11月より開始することとなった。

調査経過

当該地は平安京跡の左京三条四坊十五町に位置し、西に富小路、東が東京極大路、北が押小路、南が三条坊門小路に囲まれたところで、調査対象地は十五町の南西部・西一行北六～七門に相当する。平安時代この十五町には「山井殿」と呼ばれる邸宅があった。この邸宅は平安時代前期に

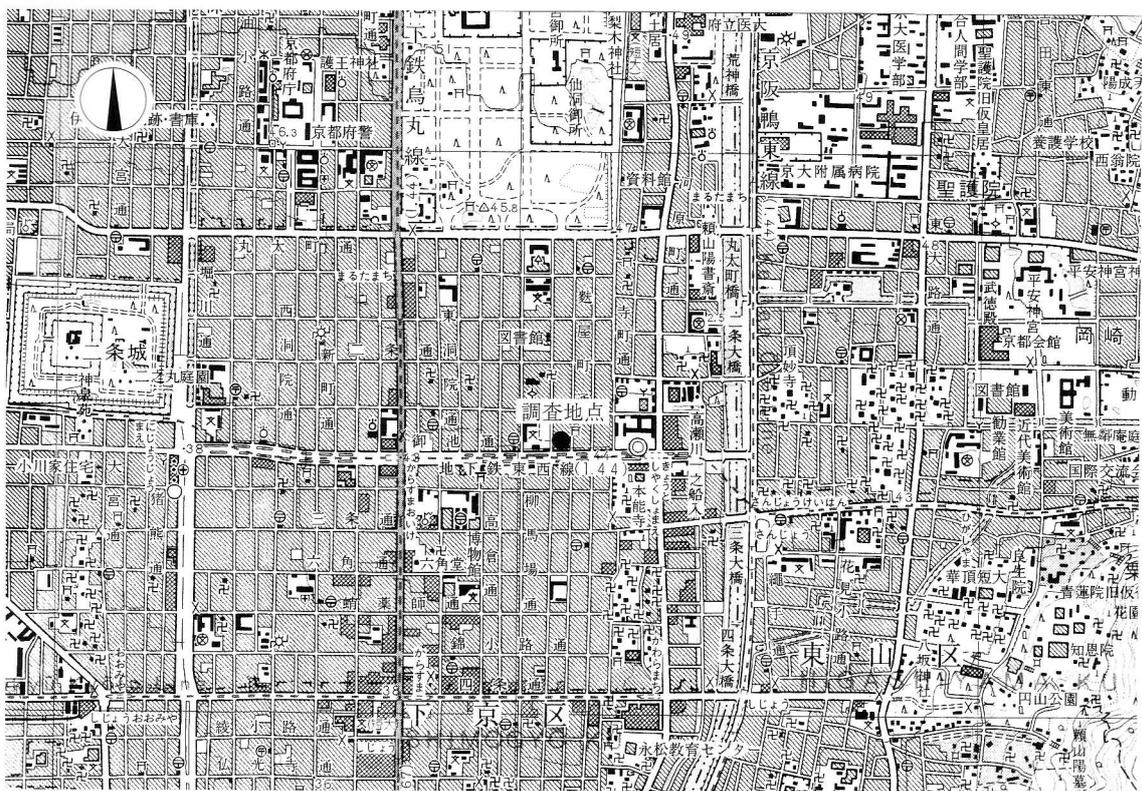


図1 調査地点位置図 (1/25,000)

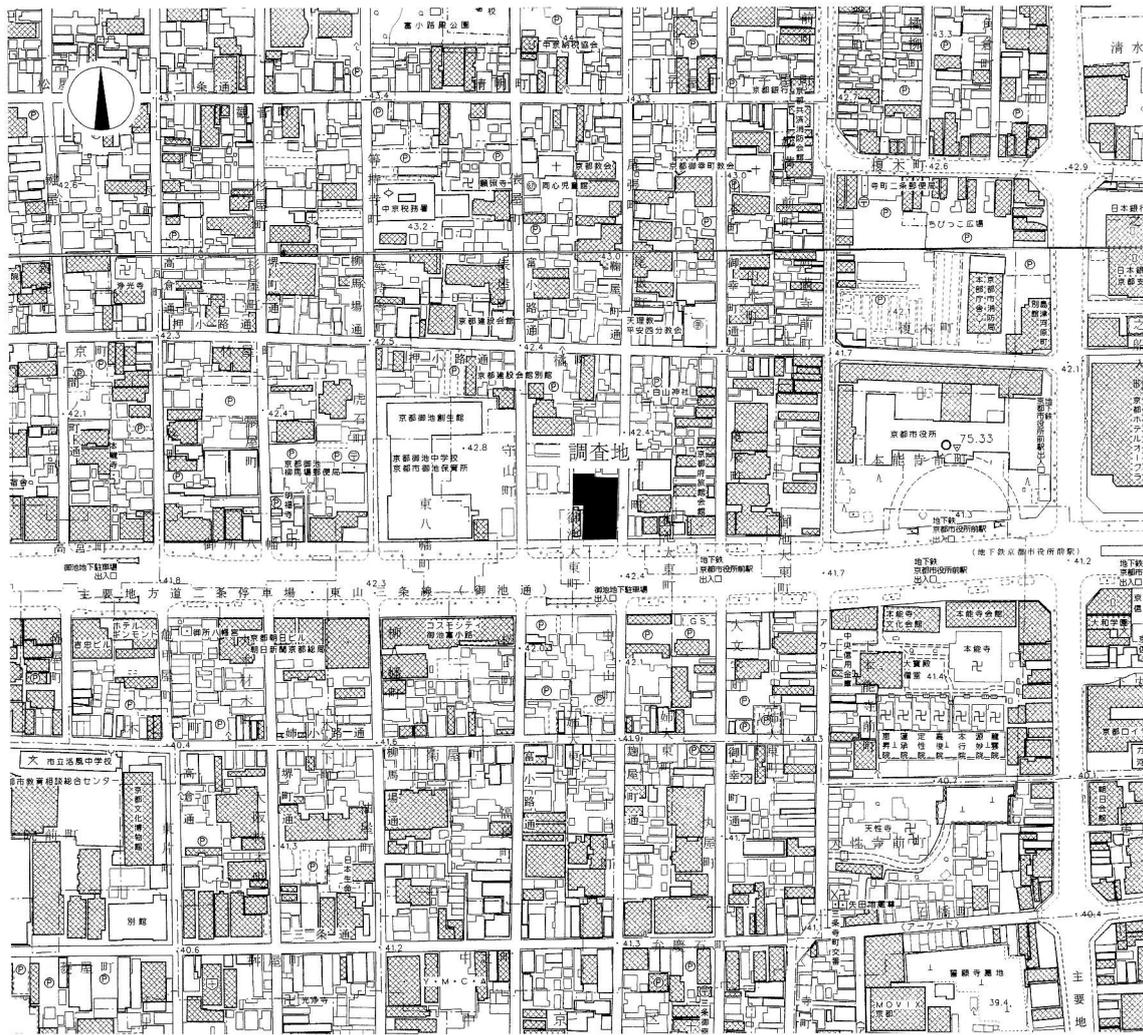


図2 調査地位置図 (1/5,000)

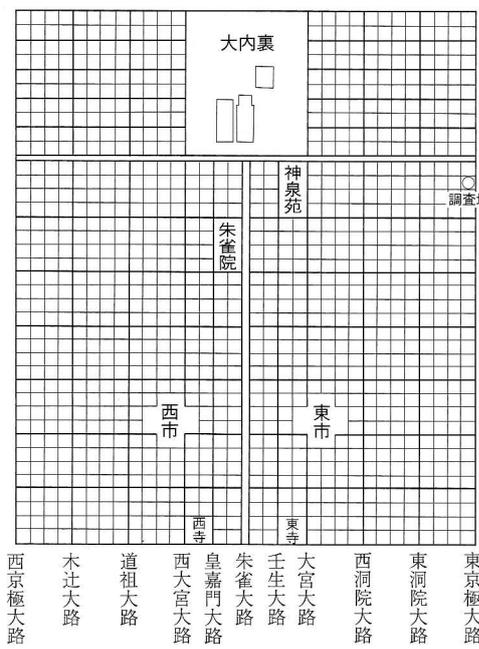


図3 平安京条坊と調査地位置図

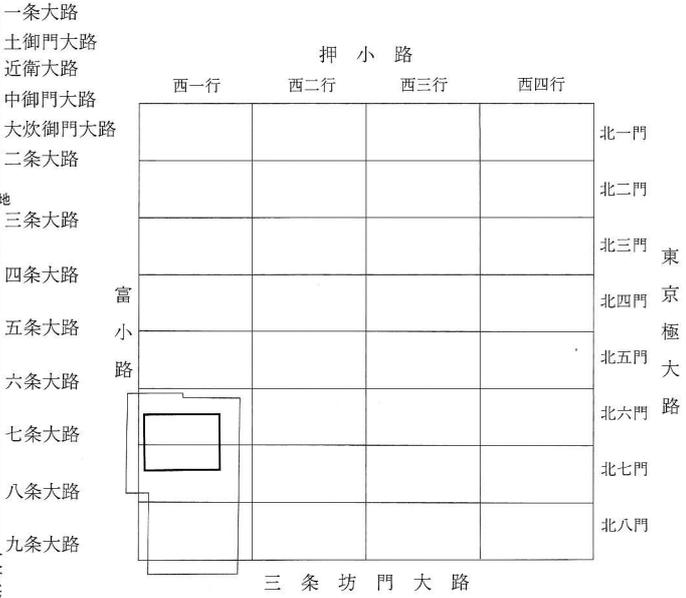


図4 四行八門と調査位置関係図 (1/2,000)

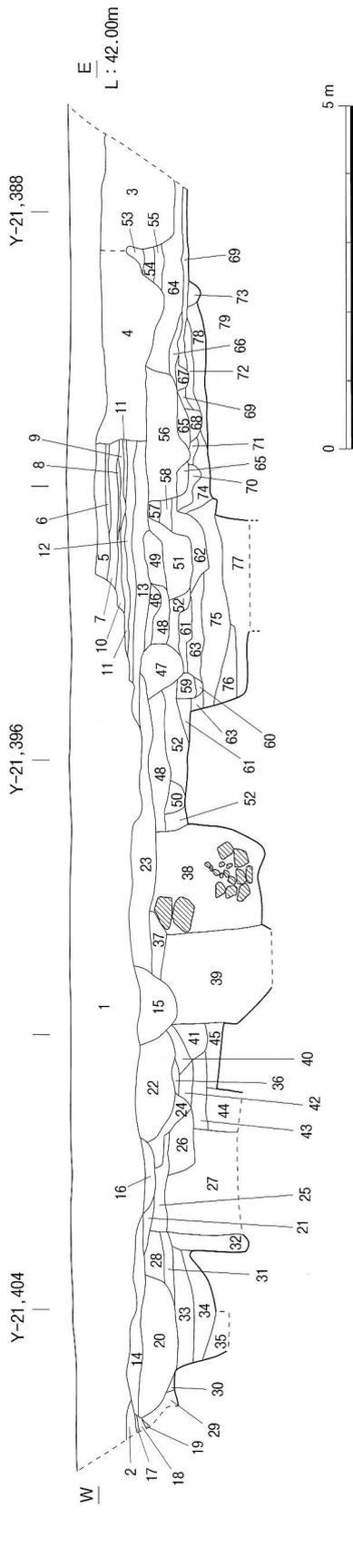
は参議の藤原綱継、中期には右大臣の藤原定方、永頼、道頼へと伝領していく。定方はこの山井殿の他に十町の「中西殿」、七町の「大西殿」の合わせて3つの邸宅を所有していた。その後山井殿は藤原道長の手に渡り、その妻明子と娘寛子の邸宅となる。中世になるとこの地における邸宅の記述は文献上には認められない^{註1}。

本調査地の近隣調査(図2)としては、2011年に当調査地の西に隣接するマンションの新築工事に伴い当調査会が発掘調査^{註2}を実施している。検出した遺構は平安時代前期から室町時代の富小路の路面とその西側溝、平安時代中期から江戸時代の土壇や柱穴などを検出している。なお、現在の富小路は2011年度調査地の西側を通り、安土桃山時代に豊臣秀吉が実施した都市改造事業である天正地割により新設されたものである。

今回の調査においては、平安京左京三条四坊十五町における宅地利用の変遷と、文献史料に見られる「山井殿」の検出を念頭に置き、試掘調査の結果を踏まえ、機械力により盛土・攪乱層を除去し、調査に着手した。調査は2014年11月4日から開始し、2015年1月10日に終了した。調査面積は300㎡で、実働日数は47日間であった。

調査の方法としては、(公財)京都市埋蔵文化財研究所が作成した平面直角座標系VIによる平安京の復原モデル60を使用し、調査区の北東角を原点(X-109,645.2、Y-21,386.5)とする、東西方向にアラビア数字を、南北方向にアルファベットを記号として付し、4mメッシュのグリッドを基本とする遺構遺物の記録をとる方法をおこなった。十五町における築地四隅の座標値(新測地系)は次の通りである。

北西	X = -109,564.13m	北東	X = -109,563.64m
	Y = - 21,408.59m		Y = - 21,289.20m
南西	X = -109,683.52m	南東	X = -109,683.03m
	Y = - 21,408.10m		Y = - 21,288.71m



- 1 盛り土及び擁壁
- 2 10YR4/3 に近い黄褐色粗砂礫
- 3 7.5YR4/4 褐色焼土 (φ5-20cm 礫多量混)
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土・漆喰多量混)
- 6 10YR3/4 暗褐色砂泥 (炭・焼土多量混)
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 (炭・焼土中量・φ1-10cm 礫多量混)
- 8 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土中量混)
- 9 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土中量混)
- 10 10YR2/3 黒褐色砂泥 (炭・焼土混)
- 11 10YR2/3 黒褐色砂泥 (炭・焼土多量混)
- 12 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土中量混)
- 13 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ1-5cm 礫少量混) (整地層②)
- 14 10YR3/1 黒褐色砂泥 (炭混)
- 15 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭混)
- 16 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥
- 17 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
- 18 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫
- 19 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (粗砂礫多量混)
- 20 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量・黄色ブロック土混)
- 21 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (炭少量混)
- 22 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭少量混)
- 23 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭少量混)
- 24 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭少量混)
- 25 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 26 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 27 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ-20cm 礫多量混)
- 28 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (整地層②)
- 29 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 30 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (シルト混)
- 31 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・黄色ブロック土混)
- 32 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥
- 33 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥
- 34 2.5Y3/2 黒褐色砂泥
- 35 5Y3/2 オリーブ黒色砂 (シルト混)
- 36 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土少量混)
- 37 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ-15cm 礫多量混)
- 38 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ30-50cm 石多量混) (土礫 39)
- 39 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ-20cm 礫多量混) (土礫 40)
- 40 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭少量混)
- 41 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥
- 42 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭少量混) (整地層③)
- 43 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (整地層④)
- 44 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥
- 45 5Y4/2 灰オリーブ色砂 (炭・シルト少量混)
- 46 10YR3/2 黒褐色砂泥 (粘土ブロック混) (整地層②)
- 47 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (粘土ブロック・焼土混)
- 48 10YR3/2 黒褐色砂泥 (φ3-10cm 石中量混) (整地層②)
- 49 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量・φ3-20cm 礫多量混)
- 50 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (φ1-3cm 礫少量混)
- 51 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ3-20cm 礫中量混)
- 52 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (φ1-5cm 礫少量混) (整地層③)
- 53 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量混)
- 54 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (φ1-5cm 礫少量混) (整地層②)
- 55 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・焼土少量混) (整地層②)
- 56 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭・φ1-15cm 礫中量混)
- 57 2.5Y3/2 暗灰黄色砂泥 (炭混) (整地層②)
- 58 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭混) (整地層②)
- 59 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭混)
- 60 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (炭混)
- 61 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ1-20cm 礫中量混)
- 62 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ1-20cm 礫少量混)
- 63 2.5Y4/2 灰黄褐色砂泥 (炭・φ5-10cm 石少量混)
- 64 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土中量・φ1-20cm 礫少量混)
- 65 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭・焼土少量・φ1-10cm 礫少量混)
- 66 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭・焼土少量混)
- 67 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭混)
- 68 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭混)
- 69 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭・φ3cm 礫少量混) (整地層④)
- 70 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭・φ1-5cm 礫少量混)
- 71 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (整地層④)
- 72 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (φ1-5cm 礫少量混)
- 73 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭・焼土少量・φ1-5cm 礫少量混)
- 74 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (φ3-10cm 礫少量混)
- 75 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (炭・φ1-15cm 礫少量混)
- 76 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (φ1-5cm 礫少量混)
- 77 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (φ1-20cm 礫多量混)
- 78 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (φ1-15cm 礫多量混)
- 79 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫 (φ1-10cm 礫少量混) (ベース)

図5 北壁断面実測図 (1/100)

Ⅱ 遺 構

調査区の現代盛土は概ね0.4~0.6m程だが、既存建物解体後の地盤改良による攪乱が、一部深さ約1mに及び、近世遺構を削平している。また、調査区南西部において南北2m×東西2.5m、高さ1.2m以上の基礎コンクリート塊を検出した。盛土の下は江戸時代の土層が地表下1.0~1.3mの厚さで堆積する。以後鎌倉時代から室町時代の中世の遺構面を経て、深さ約1.6mで平安時代後期の整地層を確認した。最終面である第4面は平安時代後期の遺構が大半を占めるが、一部中期の遺物も確認できた。また、調査区中央部から南東部にかけては、第4面の遺構の下層に庭園遺構かと考えられる溝状の遺構と池を検出した。

遺構は平安時代から江戸時代のものであり、遺構の種類としては、土壇、掘立柱、井戸、溝、埋桶遺構、庭園状遺構などがある。遺構総数は490基であった。以下、主要な遺構について述べる。

平安時代

池473 (図8・図版2の2・5の8)

調査区南東角部に位置する浅い落ち込みである。南北長6.0m以上、東西長2.4m以上で調査区外に続く。深さは0.3mを測り、上下2層の堆積が確認できる。上層は10cmまでの礫を含むオリーブ褐色砂泥、下層は3cmまでの礫を含む暗オリーブ褐色のシルト層であった。池跡ではないかと考えられ、溝480も含め庭園遺構の一部ではないかと推察する。11世紀代の土器が多く出土している。

溝480 (図8・図版2の2・5の7)

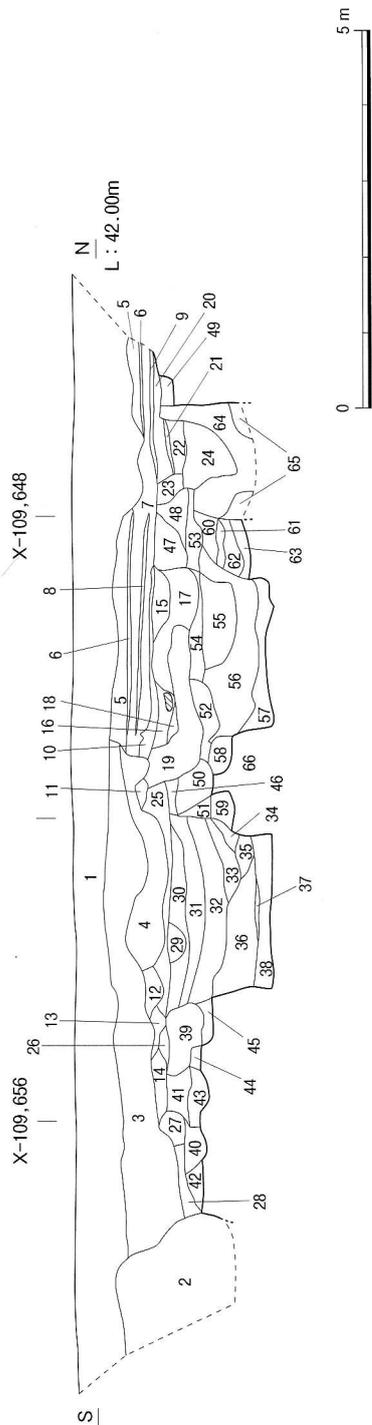
調査区中央部に位置する、東西方向の溝である。西端は堀175に、東端は近世の井戸、中央部は土壇450により削平されている。幅0.8~1.1m、深さ0.1~0.3mを測る。他の遺構による攪乱が著しく、その詳細は明らかではないが、調査区南東部の池473の方向に振れており、関連性が推察できる。

土壇369 (図8・9・図版2の2・5の6)

調査区南東部に位置する土壇である。径0.55m、深さ0.2mを測り、ほぼ円形を呈する。埋土はオリーブ褐色砂泥層である。12世紀代の完存品の土師器皿などが出土した。

柱穴351・358・378・458・467 (図8・図版2の2)

調査区東半部に位置する柱穴群である。いずれも一辺0.5~0.8mの方形の掘形をもち、深さ0.15~0.35m、柱根跡は径0.18~0.25mを測る。小片だが平安時代中期から後期の土器が出土している。これらの柱穴群は今回の調査では建物等として検出することはできなかった。しかし、削平されているが同規模と考えられる柱穴が他にも数個存在することから、この地に建物があったと推察することができる。



- | | | | | | |
|----|--|----|---|----|---|
| 1 | 盛り土及び粗乱 | 23 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭少量混) | 45 | 5Y3/2 オリーブ黒色泥土 (炭少量混) (整地層④) |
| 2 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 (炭混) (井戸 35) | 24 | 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥 (ϕ -20cm 礫少量混) | 46 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 3 | 粗乱 | 25 | 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (整地層②) | 47 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭少量混) |
| 4 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (焼土・ ϕ 2-10cm 礫少量混) | 26 | 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 48 | 25Y4/4 オリーブ褐色砂泥 (炭少量混) |
| 5 | 10YR4/3 におい, 黄褐色粗砂礫 | 27 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 (ϕ -10cm 礫少量混) | 49 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 6 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (炭混) | 28 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (ϕ -10cm 粗砂礫混) | 50 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (ϕ -10cm 礫少量混) |
| 7 | 25Y4/3 オリーブ褐色粗砂礫 | 29 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 51 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭少量混) (整地層③) |
| 8 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (粗砂・炭混) | 30 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭混) | 52 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 |
| 9 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (粗砂礫多量混) | 31 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 (炭混) | 53 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (整地層③) |
| 10 | 25Y3/2 黒褐色粗砂礫 | 32 | 5Y3/2 オリーブ褐色砂泥 | 54 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 11 | 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 33 | 5Y3/1 オリーブ褐色砂泥 | 55 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 (礫混) |
| 12 | 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 34 | 5Y3/2 オリーブ褐色砂泥 | 56 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭混) |
| 13 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 | 35 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (炭少量混) | 57 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (炭・焼土少量混) |
| 14 | 25Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (炭少量混) (整地層②) | 36 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (炭少量・シルト混) | 58 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 (炭混) (整地層④) |
| 15 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (粗砂礫多量混) | 37 | 5Y5/4 オリーブ色泥土 | 59 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (炭少量・礫少量混) (整地層④) |
| 16 | 25Y5/4 黄褐色粗砂礫 | 38 | 5Y4/3 暗オリーブ色砂泥 (炭少量・シルト・ ϕ -10cm 礫少量混) | 60 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (整地層④) |
| 17 | 25Y4/3 オリーブ褐色砂泥 (粘土ブロック・炭少量混) | 39 | 5Y4/3 暗オリーブ色砂泥 (ϕ -10cm 礫混) | 61 | 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 |
| 18 | 25Y4/4 オリーブ褐色砂礫 | 40 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (シルト混) | 62 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 |
| 19 | 25Y4/4 オリーブ褐色砂礫 | 41 | 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 | 63 | 5Y4/2 灰オリーブ色泥土 |
| 20 | 25Y5/4 黄褐色粗砂 (ϕ -10cm 礫少量混) (整地層②) | 42 | 5Y4/4 暗オリーブ粗砂 (整地層③) | 64 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 21 | 25Y3/2 黒褐色砂泥 | 43 | 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 (炭少量混) | 65 | 25Y4/2 暗灰黄色砂泥 |
| 22 | 25Y4/4 オリーブ褐色粗砂 | 44 | 5Y4/3 暗オリーブ色泥土 (炭少量混) (整地層③) | 66 | 25Y4/4 オリーブ褐色砂礫 (ϕ 1-10cm 礫少量混) (ベース) |

図 6 西壁断面実測図 (1/100)

第1面

Y-21,404

Y-21,396

Y-21,388

6

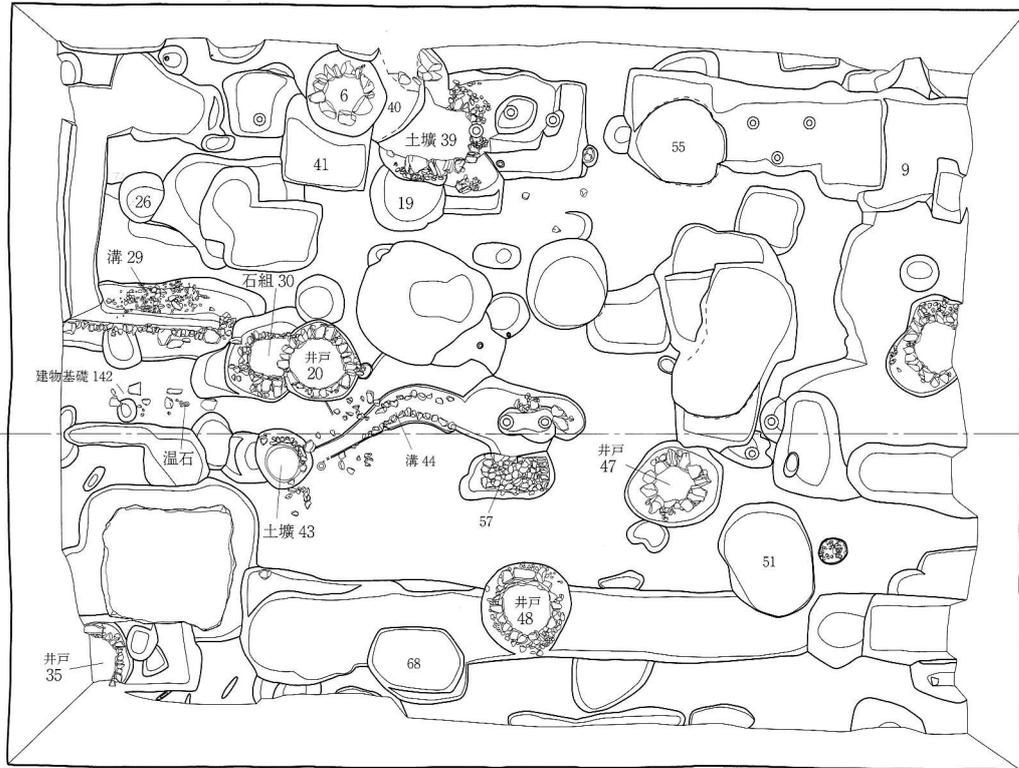
5

4

3

2

1



A

X-109,648

B

西一行北六門

C

西一行北七門

X-109,656

D

富小路東築地心推定線

第2面

Y-21,404

Y-21,396

Y-21,388

6

5

4

3

2

1



A

X-109,648

B

C

X-109,656

D



図7 第1・2面遺構実測図 (1/150)

第3面

Y-21,404

Y-21,396

Y-21,388



6

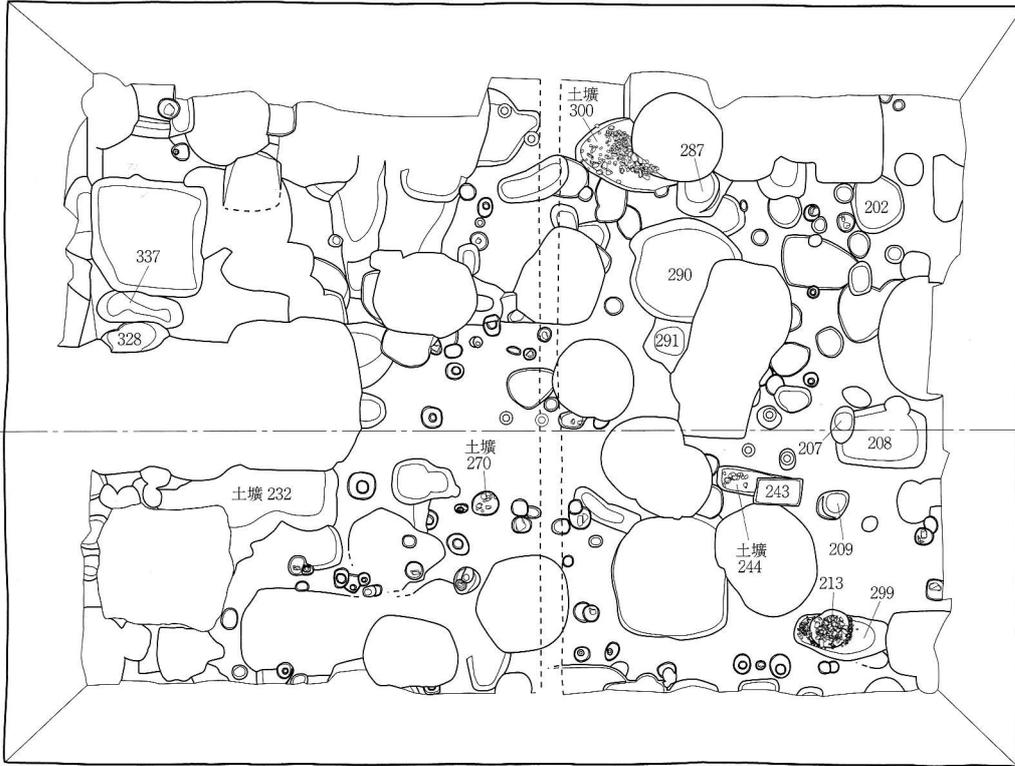
5

4

3

2

1



A

X-109,648

B

西一行北六門

西一行北七門

X-109,656

D

富小路東築地心推定線

第4面

Y-21,404

Y-21,396

Y-21,388



6

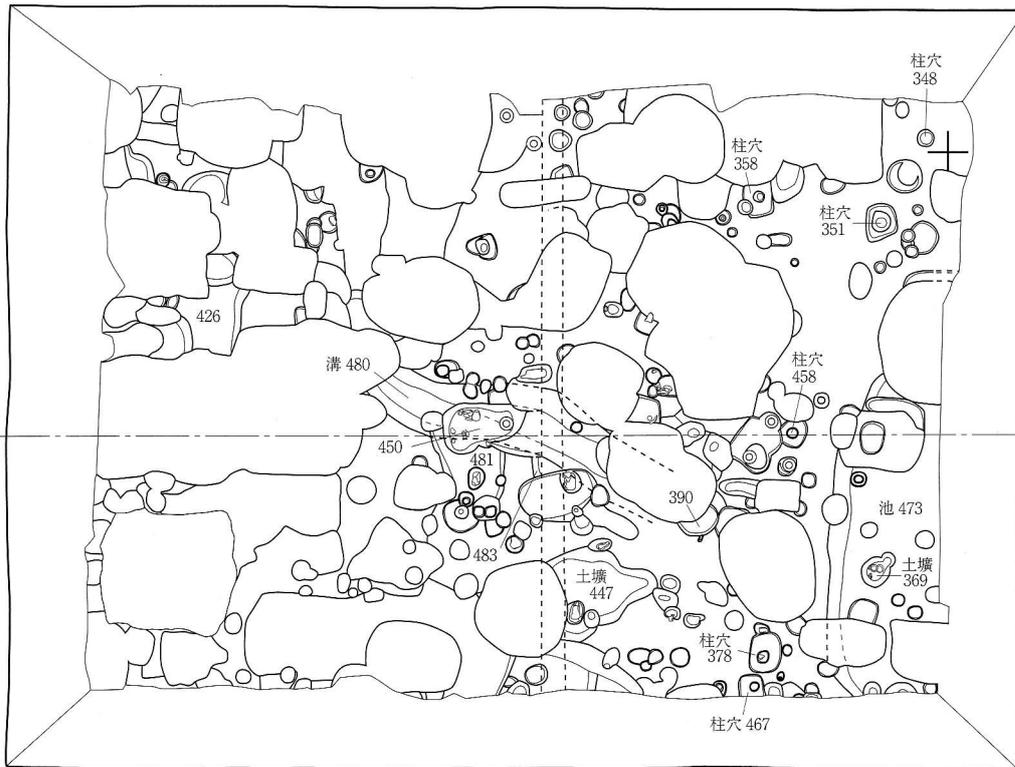
5

4

3

2

1



A

X-109,648

B

C

X-109,656

D

0 5 m

図8 第3・4面遺構実測図 (1/150)

土壙447 (図8・10・図版2の2)

調査区中央南部に位置する土壙である。西端が井戸48により削平されている。南北長1.5m、東西長1.8m以上、深さ0.55mを測る。掘形は不定形で底部は平坦である。埋土は6つに分層でき、第2層以下はシルト層である。

土壙270 (図8・図版2の1)

調査区中央南部に位置する土壙である。径0.5m、深さ0.15mを測る。掘形は円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層である。平安時代後期の土師器が出土した。

鎌倉から室町時代

土壙125 (図7・11・図版1の2・4の1)

調査区南東部に位置する土壙である。東部は調査区外となる。南北長1m、東西長1.1m以上、深さ0.3mを測る。掘形は不定形で底部は平坦である。埋土は黒褐色砂泥層で、5~20cmの礫が底まで詰められていた。瓦や13世紀後半の土器片が出土している。

土壙300 (図8・図版2の1)

調査区中央北部に位置する土壙である。東部を削平されている。南北長1.4m、東西長2.0m以上、深さ0.9mを測る。掘形はやや楕円形を呈する。埋土は黒褐色砂泥層で、10~20cmの石が底部まで密に詰まっていた。

土壙177 (図7・12・図版1の2)

調査区中央部に位置する土壙である。南部を削平されている。南北長1.6m以上、東西長0.35m、深さ0.05mを測る。掘形は溝状を呈する。埋土は黒褐色砂泥層である。鎌倉時代末期の土師器皿が掘形全体からあまり重ならない状態で出土した。

土壙299 (図8・13・図版2の1・5の1)

調査区南東部に位置する土壙である。南北長0.9m、東西長1.9m、深さ0.3mを測る。掘形は楕円形を呈し、ほぼ中央部を土壙213に削平される。埋土は2層に分けられ、上層は炭を含む黒褐色砂泥層で、土器片が多量に出土した。下層は1~3cmの礫を多く含む黒褐色砂泥層である。

土壙213 (図8・13・図版2の1・5の1)

調査区南東部に位置する土壙である。径0.8m、深さ0.15mを測る。掘形は円形を呈する。埋土は砂混じりの暗灰黄色砂泥層である。土壙299を削平するような状態で、搦鉢状の浅い掘形から3~10cmの礫を多量に検出した。

土壙244 (図8・14・図版2の1)

調査区南東部に位置する土壙である。南東部を土壙243に削平される。南北長0.5m、東西長1.4m以上、深さ0.18mを測る。掘形は角がやや丸みを帯びた方形である。埋土は2層に分けられ、上層は暗オリーブ褐色砂泥層、下層はオリーブ褐色砂泥層である。上層から出土した土師器皿は正位の状態のものが多く、2枚重ねのものもあった。

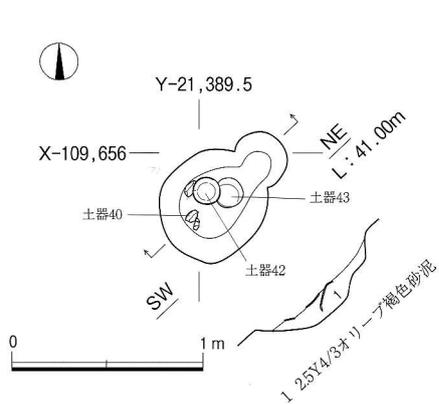


図9 土壌369実測図 (1/40)

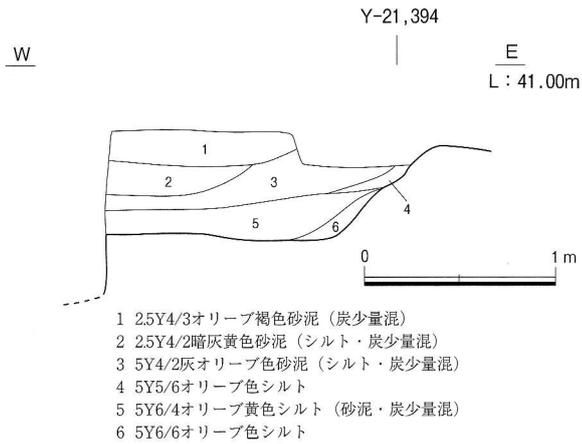


図10 土壌447断面実測図 (1/40)

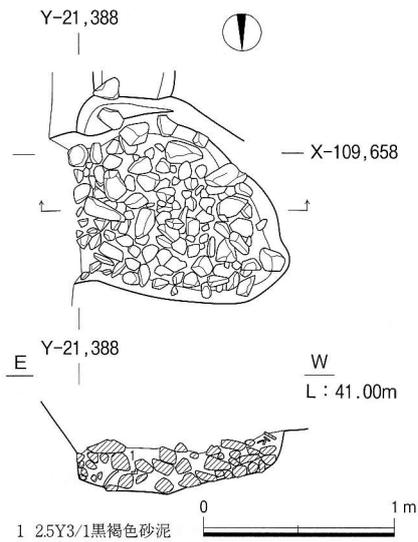


図11 土壌125実測図 (1/40)

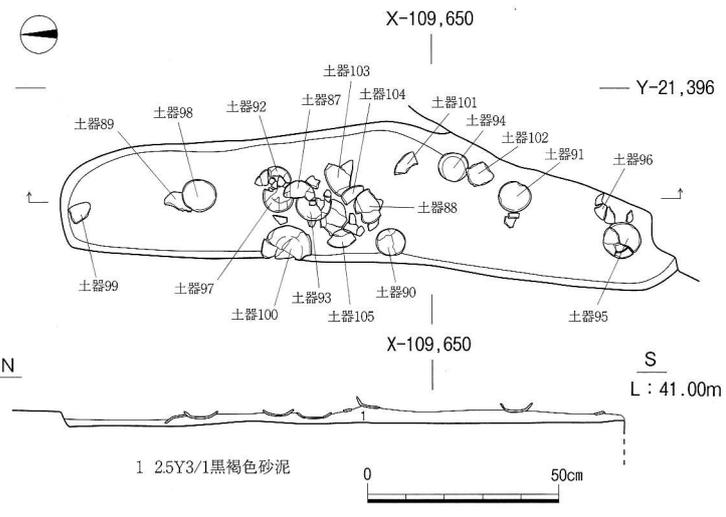


図12 土壌177実測図 (1/20)

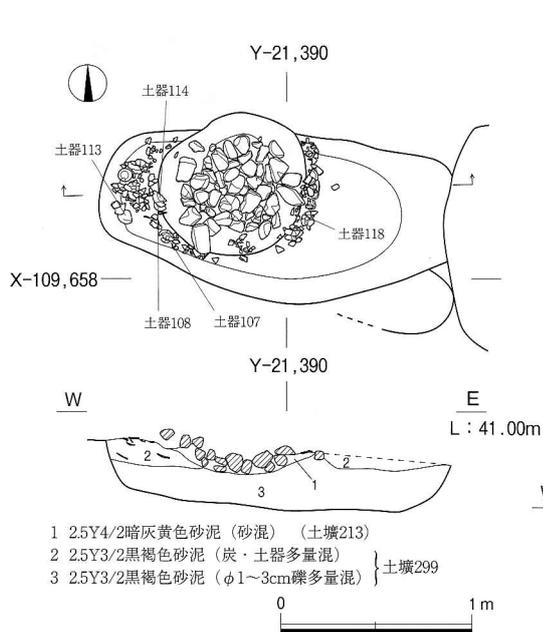


図13 土壌299・213実測図 (1/40)

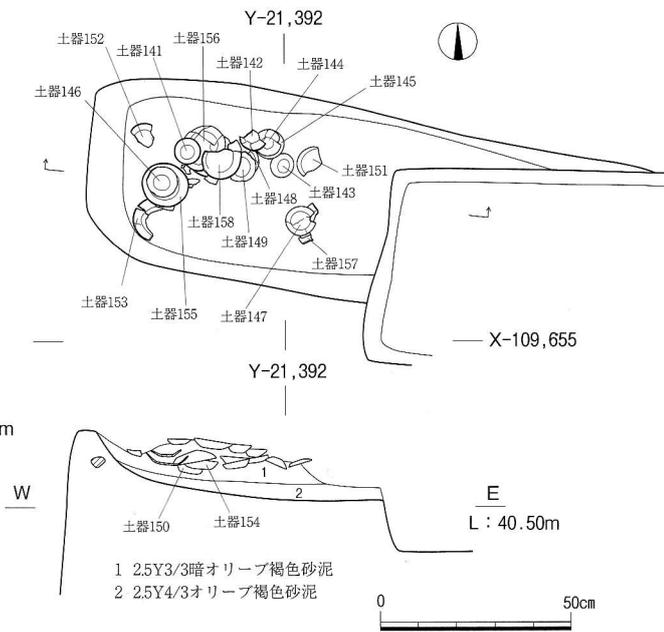


図14 土壌244実測図 (1/20)

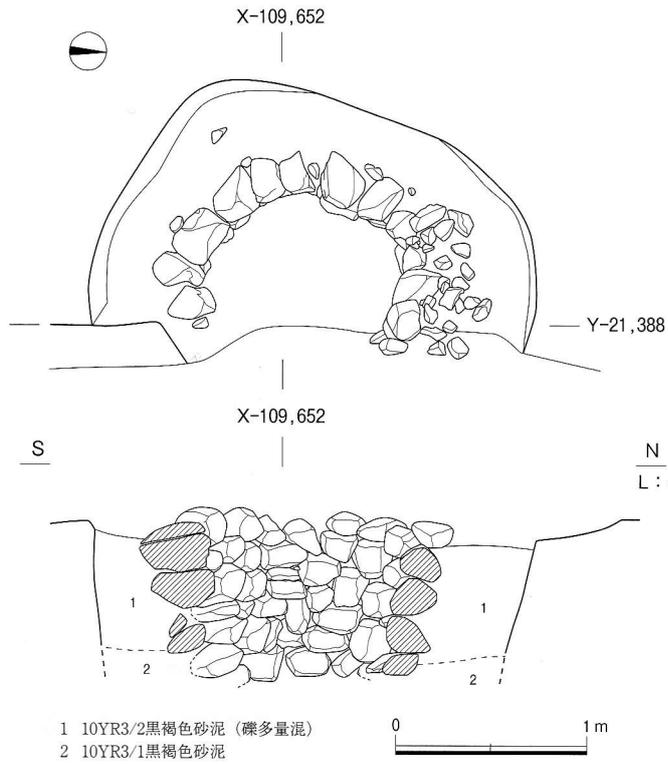


図15 井戸56実測図 (1/40)

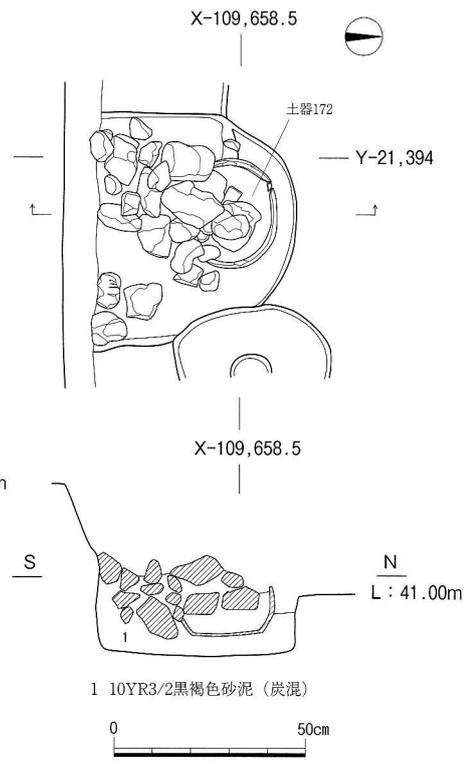


図16 土壙130実測図 (1/20)

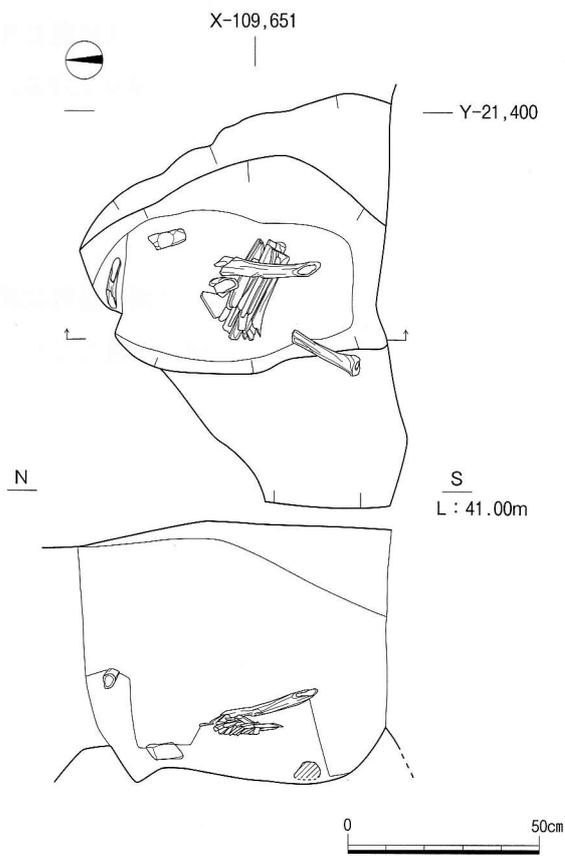


図17 土壙176実測図 (1/20)

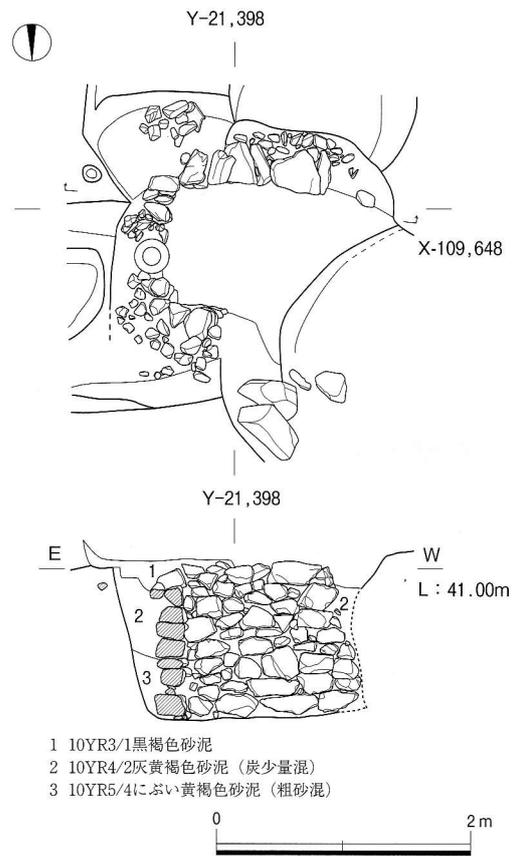


図18 土壙39実測図 (1/60)

土壙243 (図8・図版2の1)

調査区南東部に位置する土壙である。南北長0.5m、東西長0.9m、深さ0.3mを測る。掘形は長方形を呈する。底部は平坦で壁はほぼ直角に立ち上がる。埋土は黒褐色砂泥層である。下層から木の痕跡らしきものを検出したが、微かなもので詳細は分からなかった。墓の可能性を考慮することができる。遺物は上層からのみ室町時代前半の小さな土器片が出土した。

集石遺構122 (図7・図版1の2・4の1)

調査区南東部に位置する浅い集石遺構である。西と南は削平され、東端は調査区外となる。南北長1.3m以上、東西長2.5m以上、深さ0.1mを測る。埋土は暗灰黄色砂泥層で、4~10cmの石を1段検出した。一部並んでいるように見える集石だがその詳細は不明で、庭園遺構の一部かとも考えられる。室町時代の遺物が出土している。

井戸56 (図7・15・図版1の2・4の5)

調査区北東部の東壁沿いに位置する井戸である。東半分は調査区外である。掘形は径2.3mのやや歪んだ円形で、井筒は0.1~0.4mの川原石を円形に積み、内径は1.0mを測る。壁面の崩落を防ぐため掘削は深さ0.9mまでとした。確認できた掘形の埋土は2層で、上層は礫が多量に混ざる黒褐色砂泥、深さ0.8m以下の下層は黒褐色砂泥であった。室町時代の遺物が出土している。

土壙130 (図7・16・図版1の2・4の2)

調査区中央部の南壁沿いに位置する土壙である。南部は調査区外となる。南北長0.5m以上、東西長0.6m、深さ0.25mを測る。掘形はほぼ直に落ち、底部は平坦である。埋土は炭混じりの黒褐色砂泥層である。瓦器の火舎を正位の状態で据え、その上に5~15cmの石を積み上げる。

桃山から江戸時代

堀175 (図7・図版1の2・4の4)

調査区西部に位置する東西方向の堀である。南北幅2.5m、東西長5.6m以上で調査区外に続き、深さ1.3mを測る。掘形は逆台形を呈する。底部から高さ1.05mまでシルト層が堆積しており、水を湛えた堀であったと考えられる。江戸時代前期の土器類が多数出土した。

建物基礎142 (図7・図版3の5)

調査区西部の堀175の上面に位置する。建物の礎石である。上面が平坦の長辺約0.2~0.3mの切り石が並ぶ。堀175廃絶後に建てられた建物の基礎である。礎石とともに温石を検出した。

井戸48 (図7・図版1の1)

調査区中央南部に位置する円形の石組井戸である。掘形は径1.8m、深さ1.5m以上、井筒の内径は0.9mを測る。石組内から埴塼片が複数出土しており、鑄造に伴う井戸ではないかと考えられる。江戸時代中期。

土壙176 (図7・17・図版1の2・4の3)

調査区北西部に位置する土壙である。南部は井戸20に削平される。南北長0.8m以上、東西長1.1m、深さ0.65mを測る。掘形は不定形で、埋土は黒褐色砂泥層である。下層から獣骨が出土

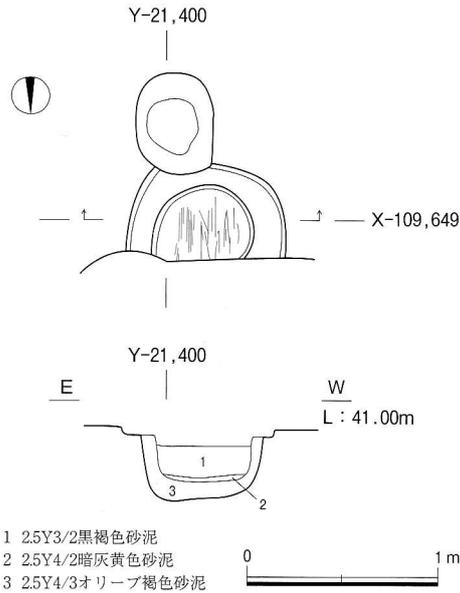


図19 土壙168実測図 (1/40)

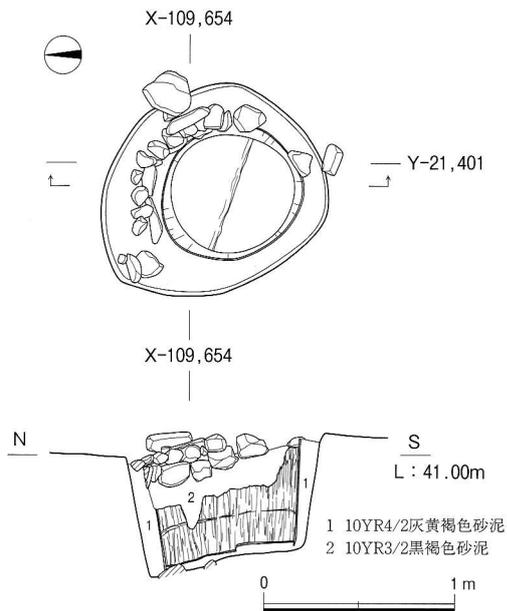


図20 土壙43実測図 (1/40)

した。獣骨の種別は不明だが、25cm程に切り揃えられており、束ねたような状態で出土した。江戸時代中期。

土壙39 (図7・18・図版1の1・3の4)

調査区中央北壁沿いに位置する石組土壙である。西部は削平され、北部は調査区外である。掘形は南北長2.0m以上、東西長2.0以上、深さ1.4mを測る。埋土は3層に分けられ、最下層は粗砂混じりのにぶい黄褐色砂泥層である。石組は方形で、内径の南北長1.0m、東西長1.3m以上である。10~45cmの石を8段程積む。貯蔵穴であったと考えられる。江戸時代中期。

土壙168 (図7・19・図版1の2)

調査区北西部に位置する土壙である。北半部を削平される。桶の底板が確認できた。桶は径0.5m、残存高は1cmもなかった。掘形は円形で、径0.8m、深さ0.4mを測る。埋土はオリーブ褐色砂泥層である。桶内は黒褐色砂泥層で、下層に1cm程暗灰黄色砂泥層が堆積する。江戸時代中期。

井戸20 (図7・図版1の1・3の1)

調査区西部に位置する円形の石組井戸である。径1.6m、深さ1.5m、井筒の内径は1.0mを測る。掘形の埋土は暗灰黄色砂泥、井筒内の埋土は灰黄褐色砂泥であった。江戸時代中期。

溝29 (図7・図版1の1・3の1・3の2)

調査区西部に位置する石列の東西溝である。西端は調査区外となる。掘形は南北幅1.5m、東西長4.0m以上、深さ0.35mを測る。石列の内幅は0.35mで、埋土は炭混じりの黒褐色砂泥層と2cmまでの礫が混じる黒褐色砂泥層である。南側の石列は3段で、溝の内側に面を揃えた10~30cmの石を積む。北側の石列は残存しておらず、3~8cmの裏込め石と考えられるものを検出した。

石組30 (図7・図版1の1・3の1)

調査区西部に位置する方形の石組である。東部を井戸20に削平される。掘形は南北長1.7m、東西長1.2m以上、深さ1.3mを測り、埋土は黒褐色砂泥層である。石組の南北の内径は0.7mで、埋土は上層が褐灰色砂泥層、下層が黒褐色シルト層である。底部は平坦で漆喰敷きである。江戸時代中期。

土壙43 (図7・20・図版1の1・3の1・3の3)

調査区南西部に位置する土壙である。桶を据えた、埋桶式便槽といわれる便所遺構である。桶は径0.75m、残存高は0.55mを測る。掘形は径1.15mである。一部、桶の縁を囲む石組が残存しており、8~18cmの石を1~2段積み上げる。桶の埋土から土師器の小皿が大量に出土している。調査区南西部で検出した土壙97(図7)も木桶の底板を確認することができた。同じく埋桶式便槽遺構ではないかと考える。2013年度の妙覚寺城跡の調査において同様の遺構を検出して^{註3}おり、この土師器皿は籌木の代わりに使用した可能性がある。江戸時代中期から後期。

Ⅲ 遺 物

出土した遺物は整理箱に110箱ある。時代は平安時代から近現代までのものがある。遺物の種類には土師器、須恵器、瓦器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品、銭貨などがある。以下主要な遺物について概述する。

なお、時代区分は平安京の土器編年^{註4}をもとにおこなう。

土器・陶磁器類

池473出土土器 (図21・図版6)

土師器皿A(1~7)、皿N(8~22)、白土器皿(23)、瓦器椀(24)、緑釉陶器椀(25)がある。皿N小の口径は9~10cm台、大は12~17cm台を測る。13は灯明皿である。23の胎土はやや粗く、2.5Y8/1灰白色で削り出し高台である。18は混入品ではないかと考える。24は内外面に密に磨きを施し、口縁端部内面に沈線が確認できる。25の胎土は硬質で、10Y4/2オリーブ灰色である。11世紀中頃から13世紀前半頃のIV期中からVI期のものである。

溝480出土土器 (図22)

土師器皿N(26~33)、灰釉陶器椀(34)、白磁碗(35)がある。皿N小の口径は9cm台~10cm、大は14~16cm台を測る。34は内外面ともに施釉し、底部内面に重ね焼き痕が確認できる。35は底部のみで、低い削り出し高台である。12世紀代。

土壙369出土土器 (図23・図版6)

土師器皿N(36~45)がある。小は口径9cm台、器高1.4~1.7cmを測る。大は14~15cm台、器高2.2~3.4cmを測る。V期中。

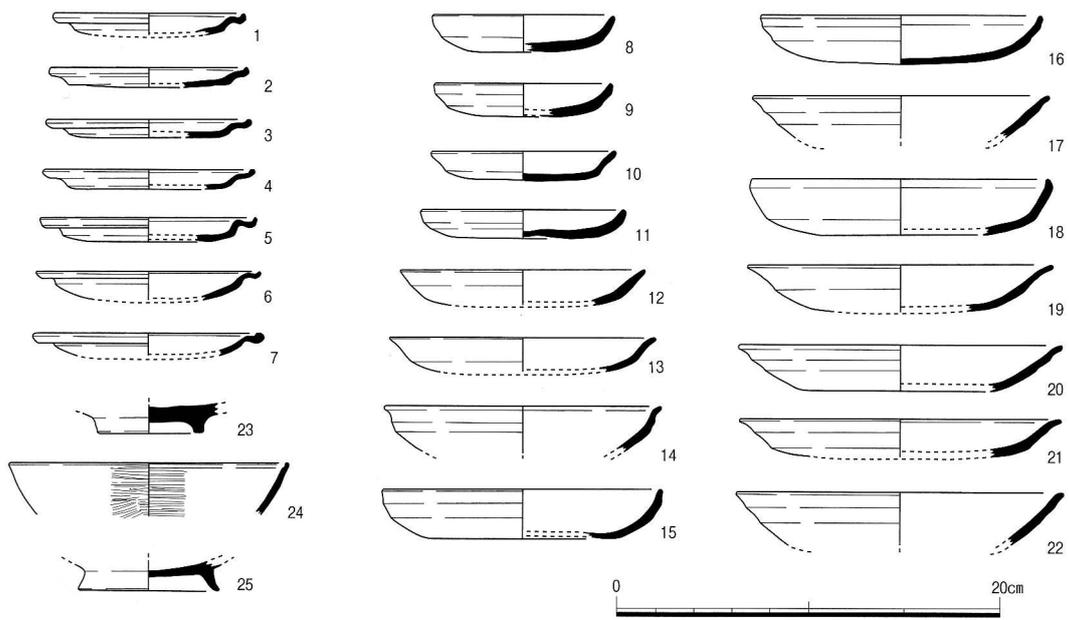


图21 池473出土遺物実測図 (1/4)

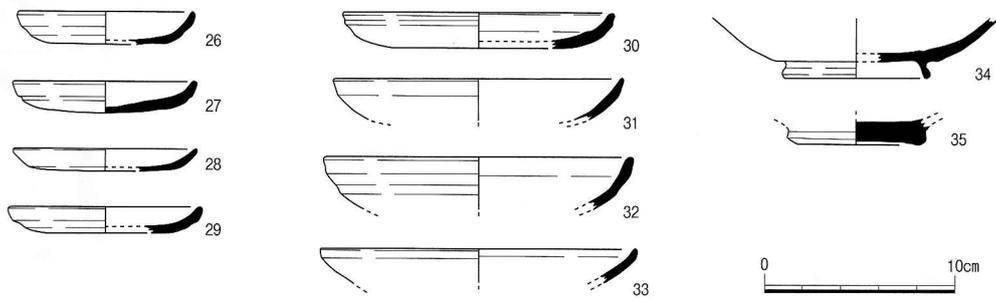


图22 溝480出土遺物実測図 (1/4)

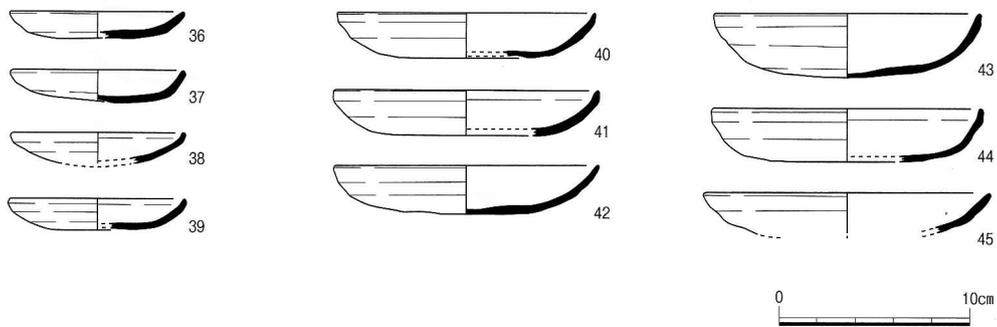


图23 土壙369出土遺物実測図 (1/4)

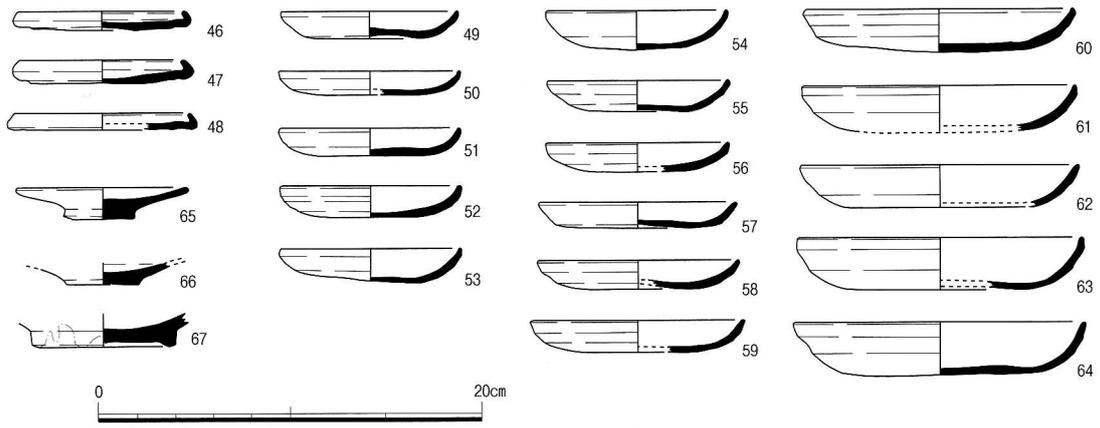


图24 土壤447出土遺物実測図 (1/4)

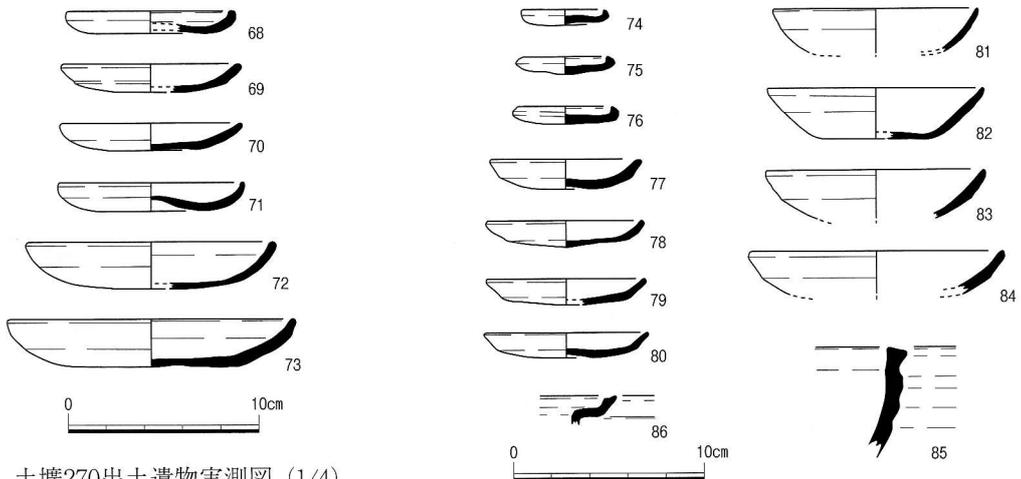


图25 土壤270出土遺物実測図 (1/4)

图26 土壤300出土遺物実測図 (1/4)

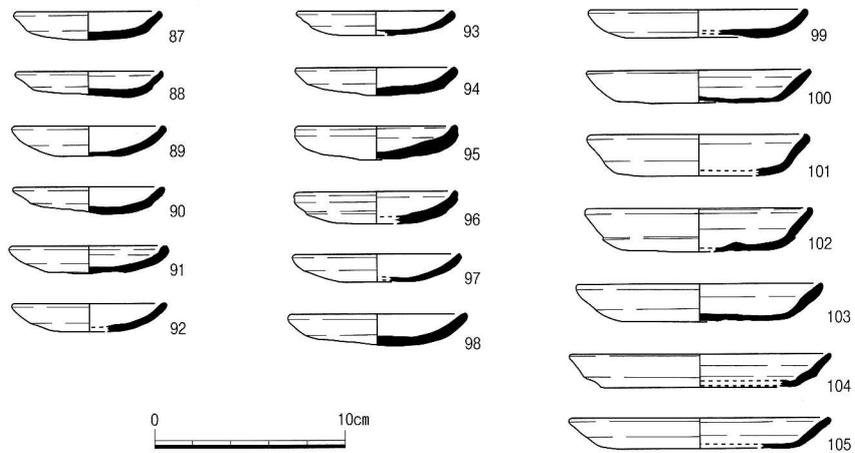


图27 土壤177出土遺物実測図 (1/4)

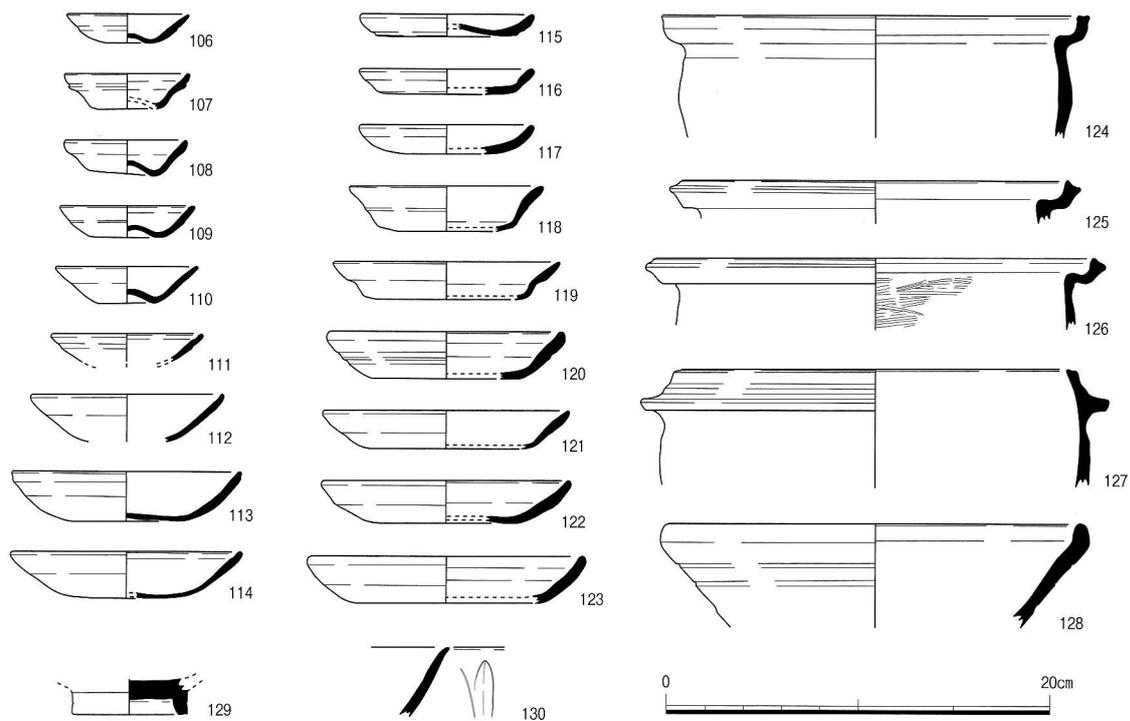


图28 土壤299出土遗物实测图 (1/4)

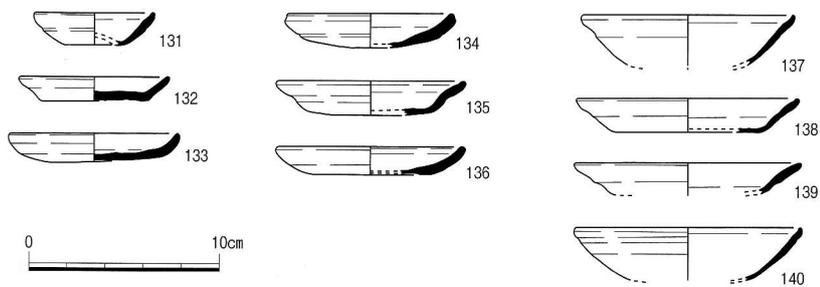


图29 土壤213出土遗物实测图 (1/4)

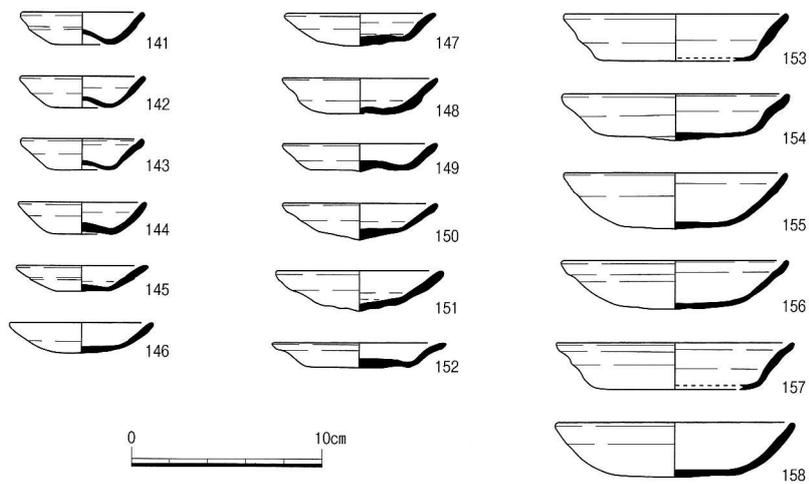


图30 土壤244出土遗物实测图 (1/4)

土壇447出土土器 (図24・図版6)

土師器皿A c (46~48)、皿N (49~64)、白土器皿 (65)、白磁皿 (66)、白磁碗 (67) がある。皿N小は口径9~11cm台、器高1.3~2.1cmを測る。大は口径14~15cm台、器高2.3~2.8cmを測る。65は10YR8/1灰白色で、底部は糸切り痕が確認できる。66、67は底部のみである。

土壇270出土土器 (図25・図版6)

土師器皿N (68~73) がある。小は口径9.0~9.8cm、器高1.2~1.5cmを測る。大は口径13.2と15.2cm、器高2.5cmを測る。12世紀後半。

土壇300出土土器 (図26・図版6)

土師器皿A c (74~76)、皿N (77~80)、皿S (81~84)、瓦器鉢 (85)、瓦器鍋 (86) がある。皿A c は口径4.6~5.6cm、器高1.0cmを測り、10YR8/2灰白色である。皿Nは口径8.0~8.7cm、器高1.4~1.6cmを測る。皿Sは口径10~13cm台である。86は鍋の口縁部で、外面が煤ける。Ⅶ期に属する。

土壇177出土土器 (図27・図版6)

土師器皿N (87~105) がある。小は口径7~8cm台、器高1.3~1.8cmを測る。大は口径11~13cm台、器高1.6~2.3cmを測る。87、91~93は口縁端部に煤が確認できることから灯明皿である。Ⅵ期。

土壇299出土土器 (図28・図版6)

土師器皿S h (106~110)、皿S (111~114)、皿N (115~123)、鍋 (124)、瓦器鍋 (125、126)、瓦器羽釜 (127)、須恵器鉢 (128)、白磁碗 (129)、青磁碗 (130) がある。皿S hは口径6~7cm台、器高1.5~2.0cmを測る。皿Sは8~12cm台、器高1.4~3.5cmを測る。皿N小は口径9.0cm、器高1.2~1.6cmを測る。大は口径10~14cm台、器高2.0~2.5cmを測る。124は内外面ともに煤ける。126は体部内面に浅いカキメ痕が確認できる。127は鏝の下を指で強く押さえる。128は内外面ともに煤ける。129は底部のみで、削り出し高台である。130は7.5Y5/2灰オリーブ色の釉薬を施釉し、外面に蓮弁文を施す。室町時代前半。

土壇213出土土器 (図29・図版7)

土師器皿S h (131)、皿N (132~136、138、139)、皿S (137、140) がある。131は口縁端部外面に強い横ナデを施す。皿N小は口径8~10cm、器高1.3~1.8cmを測る。大は口径11.8cmと12cm、器高1.8cmを測る。132の底部は糸切り痕が確認できる。室町時代のものとする。

土壇244出土土器 (図30・図版7)

土師器皿S h (141~144)、皿N (145~154、157)、皿S (155、156、158) がある。皿S hは口径6.6~6.8cm、器高1.7cmを測る。皿N小は口径7.0~9.2cm、器高1.3~2.1cmを測る。大は口径11.8~12.6cm、器高2.5~2.9cmを測る。皿Sは口径11.8~12.6cm、器高2.6~2.9cmを測る。143、145は口縁端部に煤が付着することから、灯明皿である。室町時代。

井戸56出土土器 (図31)

土師器皿N (159)、皿S b (160)、皿S (161~165)、瓦器碗 (166)、瓦器鍋 (167、168) が

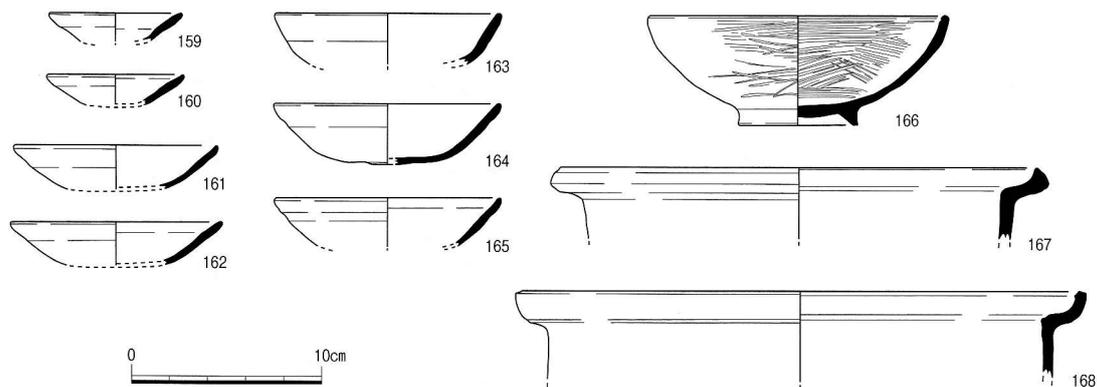


図31 井戸56出土遺物実測図 (1/4)

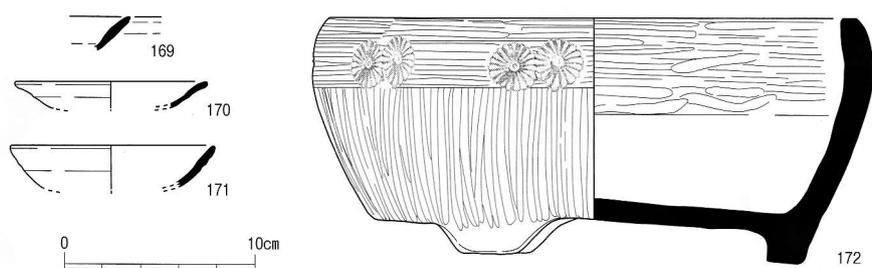


図32 土壙130出土遺物実測図 (1/4)

ある。皿 S は口径9.8~12cm、器高2.3~3.2cmを測る。166は口径15.8cm、底径6.2cmで、器高5.8cmを測る。高台は貼り付けで、口縁端部内面に沈線を施す。内外面ともに磨きは密で、底部内面には格子状の磨きを施す。167、168は鍋の口縁部で、167は口径26.0cmを測る。168は口径30.0cmを測り、口縁部内面から外面にかけて煤と炭化物が付着する。Ⅷ期に属すと考える。

土壙130出土土器 (図32)

土師器皿 N (169)、皿 S (170、171)、瓦器火舎 (172) がある。172は口径27.6cm、器高13cmを測る。体部内面から外面にかけて密に磨きを施す。口縁部外面に2個で一単位の菊文を7カ所押印する。底部には径0.8cmと1×1.5cmの穿孔を2カ所確認した。室町時代。

堀175出土土器 (図33・図版7)

土師器皿 N r (173~176)、皿 S b (177)、皿 S (178~182)、蓋 (183)、塩壺 (184、185)、鍋 (186)、瓦器壺 (187)、瓦器瓦灯 (188、189)、白磁碗 (190)、施釉陶器 (191~198)、焼締陶器 (199~201) がある。皿 N r は口径5.4~6.0cm、器高1.2~1.4cmを測る。皿 S は口径10.0~14.0cm、器高2.1~2.5cmを測る。186は焙烙鍋である。口径29.8cmを測る。内外面ともに煤けている。187は小壺で、口径6.4cm、器高5.9cmを測る。内面から口縁部外面は横ナデ、体部外面中央部は指押え、その下に沈線を1本施す。体部下半は削り後、磨きを施す。188は燈火皿の受け部分である。190は底部のみである。細かな貫入が認められる。191~193は美濃瀬戸皿である。192と193は底部内面にトチン痕が確認できる。194、195は美濃瀬戸碗である。196、197は天目茶

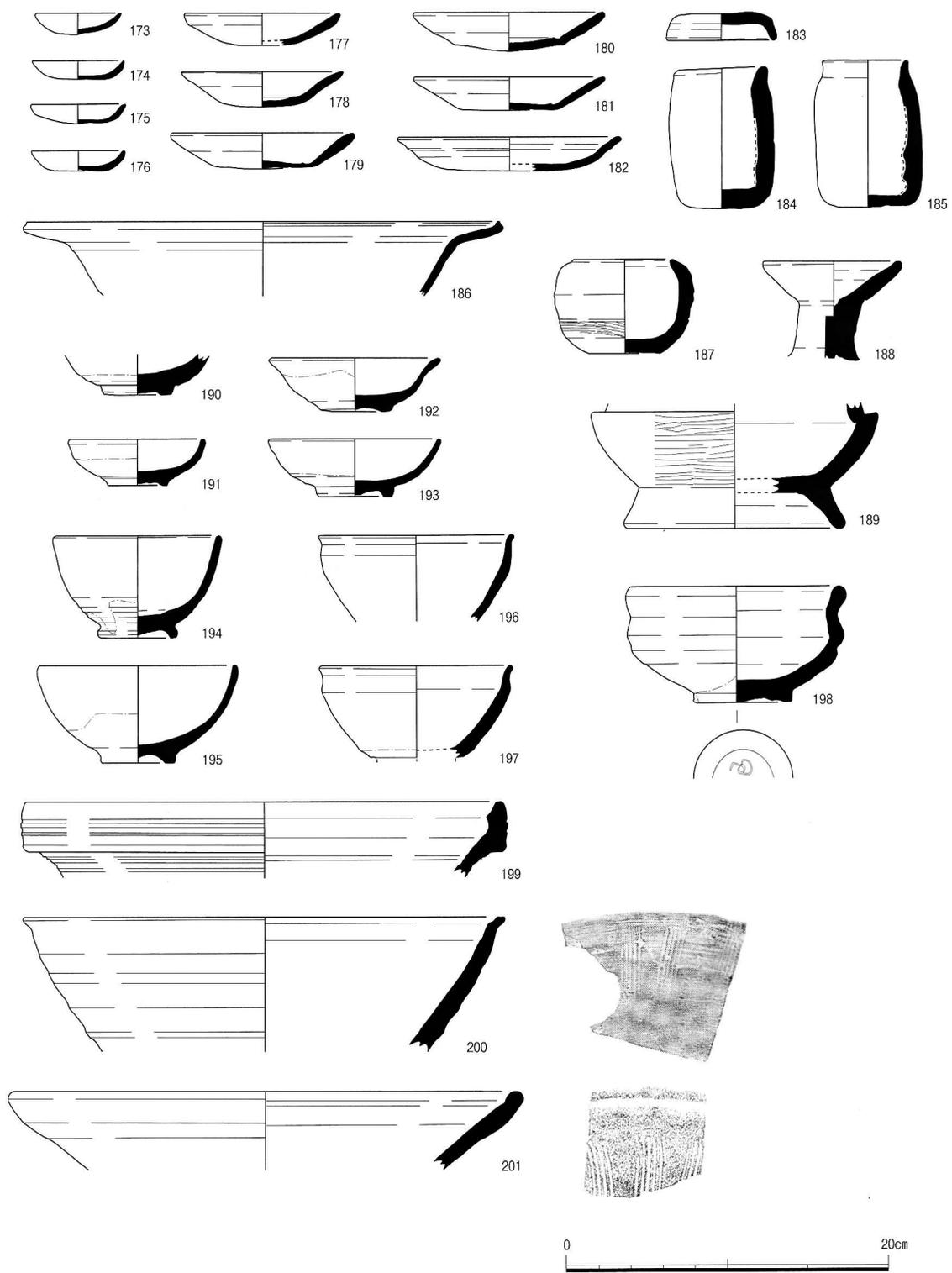


图33 掘175出土遺物実測図 (1/4)

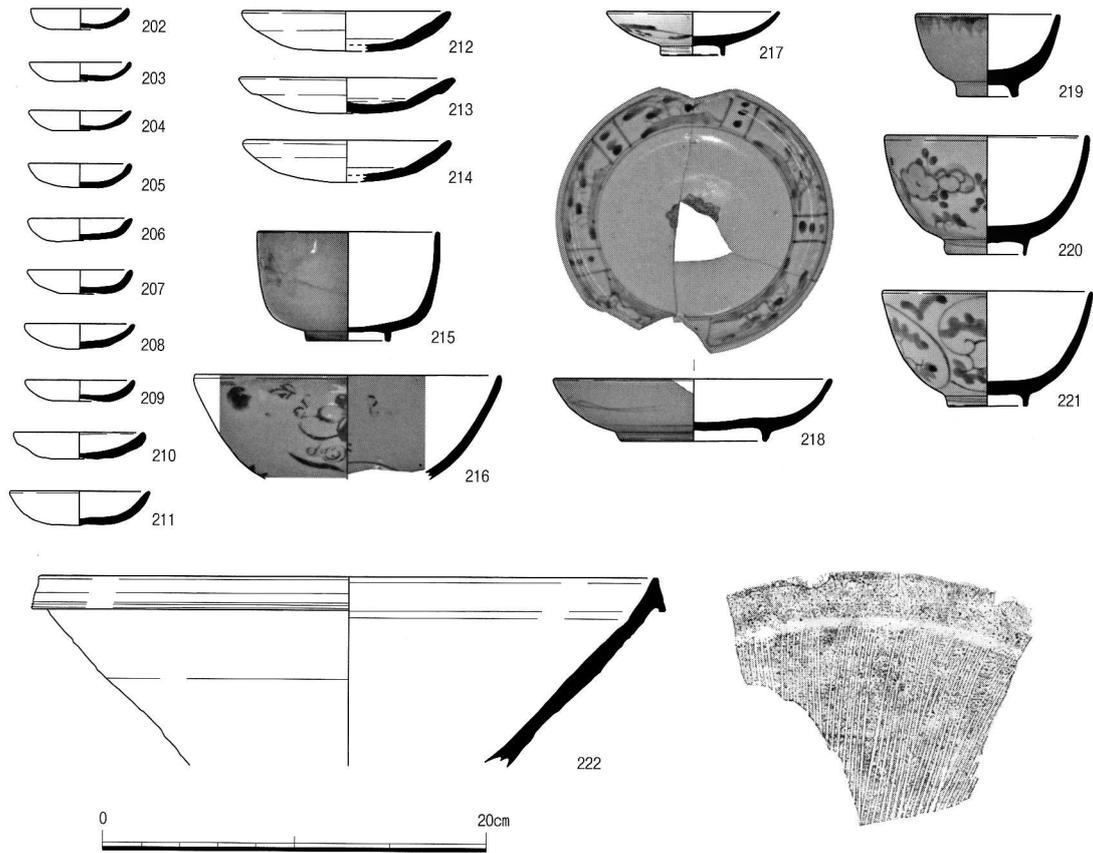


図34 土壙43出土遺物実測図 (1/4)

碗である。198は黒沓茶碗で、底部外面に線刻が確認できる。199は備前系播鉢、200は信楽系播鉢、201は丹波系播鉢である。江戸前期。

土壙43出土土器 (図34・図版7)

土師器皿N r (202~211)、皿S (212~214)、施釉陶器 (215~216)、染付磁器皿 (217、218)、染付磁器碗 (220~221)、焼締陶器 (222) がある。皿N r は口径5.4~7.4cm、器高1.1~1.8cmを測る。皿S は口径11.0と11.2cm、器高1.9~2.2cmを測る。214は灯明皿である。215は黄瀬戸碗である。銅釉の緑で文様が施されている。216は呉須赤絵碗である。222は備前系播鉢である。江戸中期から後期。

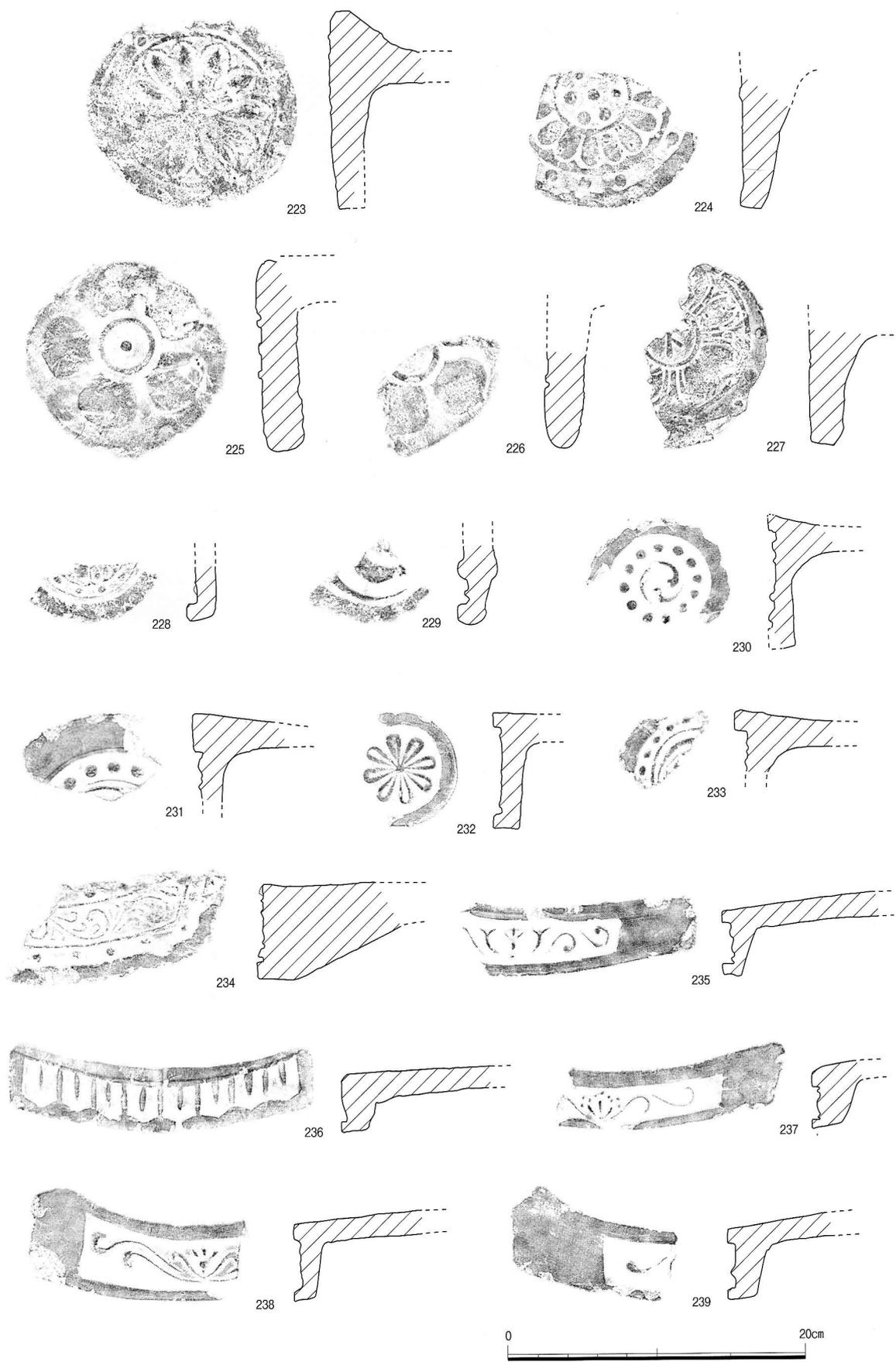


图35 軒瓦拓影·实测图 (1/4)

瓦類・瓦質製品（図35・36・図版8～10）

単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（223）

土壙232出土。中房は平坦で、蓮子は明瞭でないが1 + 4か。子葉は盛り上がり、外区に珠文を配する。瓦当上面はケズリ、瓦当裏面は指ナデ痕が確認できる。丸瓦部裏面に残る布目痕は瓦当との接合の際にナデ消されている。胎土は5mm以下の砂粒を多く含み、灰白色を呈する。森ヶ東瓦窯産である。

単弁十五葉蓮華文軒丸瓦（224）

土壙426上面（整地層④）出土。外区に子葉と同数の珠文を配する。中房の蓮子は1 + 6。瓦当部側面は横ケズリを施し、瓦当裏面は指ナデ痕が確認できる。胎土は1cm以下の小石を含み、灰白色を呈する。

素弁五葉蓮華文軒丸瓦（225・226）

225は土壙337出土。中房は圏線で表され、中心に蓮子を1個配する。外区周縁はない。瓦当裏面は布目痕が残る。一本造りである。胎土は1cm以下の小石を含み、灰白色を呈する。226は土壙328出土。225と同文である。瓦当裏面は粗い布目痕が残る。胎土は3mm以下の砂粒を含み、黄灰色を呈する。

単弁八葉軒丸瓦（227）

土壙337出土。単弁で輪郭線があり、中房に「下」銘を入れる。外区に珠文を配する。瓦当部側面は横方向のケズリ、瓦当上面は縦方向のケズリ、瓦当裏面はナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を含み、黄灰色を呈する。2013年度の妙覚寺城跡の調査において同様の瓦が報告されている。^{註5} 森ヶ東瓦窯産である。^{註6}

複弁五葉蓮華文軒丸瓦（228）

土壙287出土。瓦当裏面は指ナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈する。二次焼成を受けている。

三巴文軒丸瓦（229・231・233）

229は土壙165出土。右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。胎土は3mm以下の砂粒を含み、灰白色を呈する。231は土壙39第1層出土。右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。外区に径1cmの珠文を密に配する。瓦当周縁部はケズリ調整を施す。瓦当裏面は丁寧なナデ、丸瓦裏面はやや粗い指ナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を含み、黄灰色を呈する。233は3・B区整地層②出土。右巻きの巴文である。外区に珠文を密に配する。瓦当部側面から上面及び裏面はナデ調整である。胎土は3mm以下の砂粒を含み、灰白色を呈する。

三巴文軒棧瓦（230）

井戸94石組内出土。右巻きの巴文である。尾部が互いに接しない。外区に12個の珠文を配する。瓦当部側面から上面及び裏面はナデ調整である。胎土は精良で微砂粒を含み、灰色を呈する。

菊文棟丸瓦 (232)

5・B区整地層②出土。蓮弁は単弁8弁で、弁央はくぼむ。瓦当部側面の上半は縦ナデ、下半は横ナデ、裏面はナデを施す。胎土は精良で微砂粒を含み、灰色を呈する。

唐草文軒平瓦 (234・235・237～239)

234は土壙300出土。瓦当凹面はやや雑なナデ、顎部凸面から瓦当裏面は横ケズリを施す。胎土は2mm以下の砂粒を含み、オリーブ黒色を呈する。235は井戸47出土。瓦当凹面は縦方向のケズリ、顎部凸面から瓦当裏面は丁寧な横ナデを施す。胎土は精良で微砂粒を含み、灰色を呈する。237は土壙39第1層出土。瓦当凹面はケズリ、顎部凸面から瓦当裏面は横ナデを施す。胎土は1.5mm以下の砂粒を含み、灰色を呈する。238は土壙39第1層出土。瓦当凹面と顎部凸面から瓦当裏面は丁寧な横ナデを施す。胎土は精良で、6mm以下の小石を含み、灰白色を呈する。239は溝29掘形出土。瓦当凹面は布目痕にケズリを施す。顎部凸面から瓦当裏面は横ナデを施す。胎土は精良で、オリーブ黒色を呈する。焼きがやや甘い。

剣頭文軒平瓦 (236)

土壙125出土。剣頭文を8個放射状に配する。瓦当周縁はケズリ、顎部凸面から裏面は横ナデを施す。平瓦部凹面は布目痕、凸面には指押え痕が確認できる。折り曲げ式である。胎土は精良で2mm以下の砂粒を含み、灰色を呈する。

瓦質温石 (240～242)

3点とも建物基礎142と同一面で出土した。240は径9.2cm、厚さ2.9cm、穿孔径2.2cmを測る。表面は粗いナデ、孔は横ナデを施す。胎土は精良で灰色を呈する。241は径9.4cm、厚さ3.1cm、穿孔径2.4cmを測る。下面はケズリ、側面は横ナデ、上面は未調整である。胎土はやや粗く微砂粒を含み、灰白色を呈する。焼きがやや甘い。242は径10.4cm、厚さ2.0cm、穿孔径2.1cmを測る。上下面はケズリ、側面はナデを施す。胎土は精良で微砂粒を含み、灰色を呈する。

石製品 (図37・図版10)

砥石 (243～246)

243は土壙150出土。残存長8.2cm、幅3.5cm、厚さ0.6cmを測る。片面および側面を砥石として使用する。244は土壙26上層出土。残存長8.5cm、残存幅5.5cm、厚さ1.7mmを測る。片面および側面を砥石として使用する。245は井戸20石組内出土。残存長7.1cm、幅5.2cm、厚さ2.4cmを測る。全面を砥石として使用する。246は土壙130出土。残存長9.5cm、幅5.3cm、厚さ1cmを測る。全面を砥石として使用する。

硯 (247・248)

247は溝29掘形出土。長方形の硯で、長径8.4cm、短径3.3cmを測る。擦痕が多く残る。248は土壙40掘形出土。長方形の硯で、長径13.9cm、短径4.9cmを測る。墨が確認できる。

滑石製羽釜 (249・250)

249は柱穴114出土。口径24.2cmを測る。口縁部は肥厚し、端部は平坦面を設ける。外面の鍔以

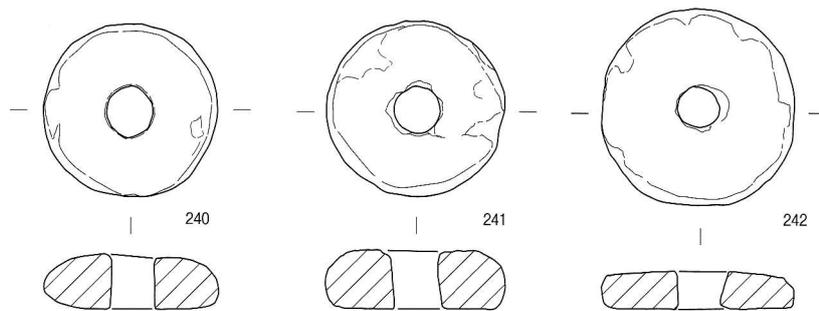


図36 瓦質温石実測図 (1/4)

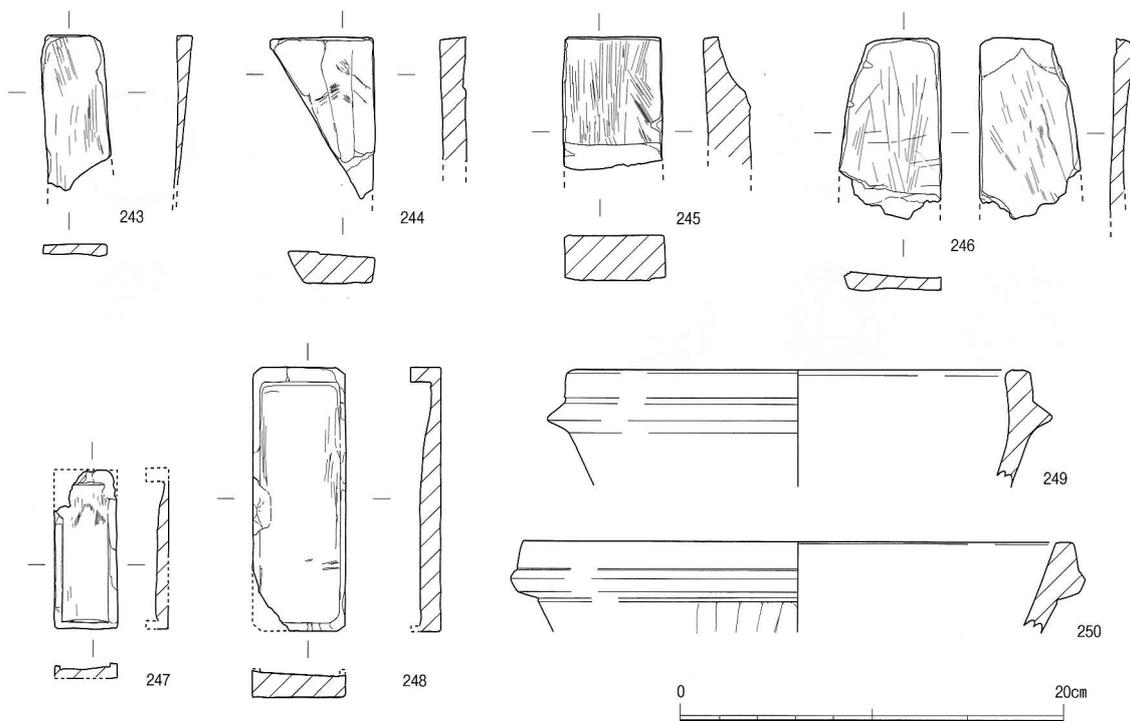


図37 石製品実測図 (1/4)

下は煤が付着する。250は溝132出土。口径28.8cmを測る。口縁端部は平坦面を設け、体部外面に縦方向の加工痕が確認できる。口縁部断面に二次使用痕と考えられる擦痕が見られる。

土製品・金属製品 (図38~40・図版10)

罎埴 (251)

井戸48石組内出土。径20cm、器厚約3cmを測る。内面には緑青が認められる。

小柄 (252)

5・C整地層②出土。残存長9.4cm、幅1.5cmを測る。蟹の装飾が確認できる。

針 (253)

井戸20掘形出土。長さ8cm、最大幅0.45cmを測り、扁平形である。

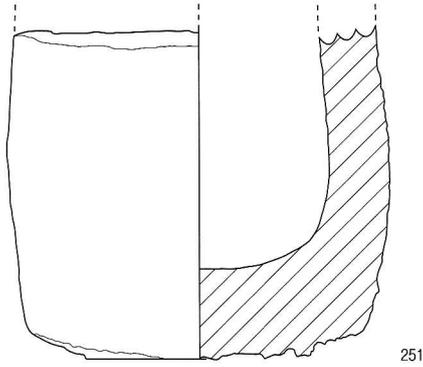


図38 土製品実測図 (1/4)

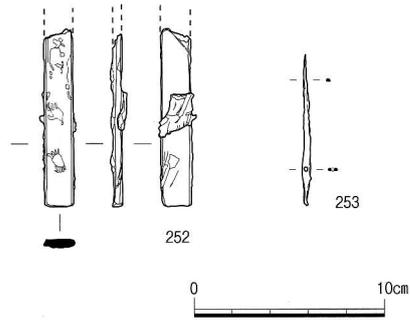


図39 金属製品実測図 (1/4)

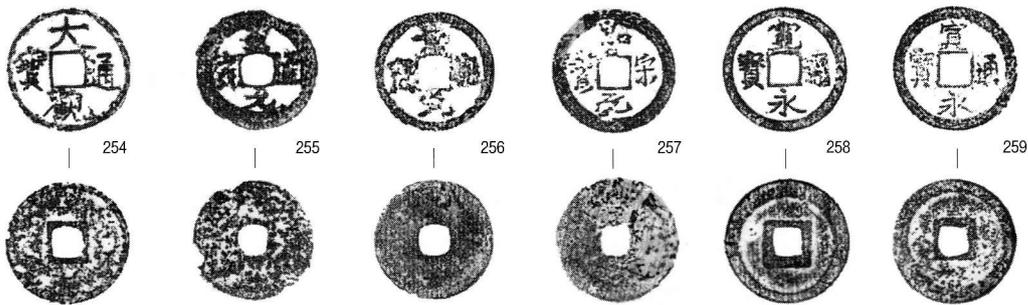


図40 銭貨拓影図 (1/1.5)

銭貨 (254～259)

大観通寶 (254) は1107年初鑄。3・C区整地層③より出土。景德元寶 (255) は1004年初鑄。江戸時代の土壙146より出土。至道元寶 (256) は995年初鑄。柱穴184より出土。聖宋元寶 (257) は1101年初鑄。江戸時代の溝29掘形より出土。寛永通寶 (258・259) の内、258は土壙9より出土。古寛永である。259は調査区南東部より第1面遺構精査時に出土。新寛永である。

IV ま と め

今回の調査においては、平安時代から江戸時代にかけての土壙や井戸、堀、柱穴、庭園遺構と考えられる集石遺構や池などを検出した。

調査地である平安京左京三条四坊十五町は、「山井殿」と呼ばれる邸宅があったと文献に記されている。この邸宅は平安時代前期には参議の藤原綱継、中期には右大臣の藤原定方、永頼、道頼へと伝領していく。定方は「山井殿」の他に十町の「中西殿」、七町の「大西殿」の合わせて3つの邸宅を所有していた。その後「山井殿」は藤原道長の手に移り、その妻明子と娘寛子の邸宅となる。しかし中世になると、この地における邸宅の記述は文献上には認められなくなる。今回はこの「山井殿」の検出を念頭に置き調査をすすめたが、平安時代前期に遡る建物遺構は検出できなかった。しかし、調査区東部において11世紀代の方形の掘形をもつ柱穴跡を複数検出することができた。これらの柱穴は近世以降の井戸や土壙によって削平を受け、建物跡として復原することはできなかったが、文献史料にある邸宅の存在を推察することができた。

また、2011年度に実施された隣地調査で、平安時代前期から室町時代後期の路面と側溝が確認されている。この路面がもともとは本調査地の西側を走る富小路で、桃山時代の秀吉の都市改造によって現在の富小路に移動している。検出された路面上には江戸時代の遺構が成立展開しており、桃山時代にはすでに道路としての機能を停止していた可能性が指摘されている。今回の調査地も同様に、富小路の宅地化とともに大規模な堀や井戸などが数多く掘られていることが判明した。

以上、今回の調査では、文献史料にもある平安時代の「山井殿」と呼ばれる邸宅の存在を推察することができた。また、隣地調査の報告も合わせて、この地が天正地割による富小路の移動により宅地化していく様相を窺い知ることができた。

註1 『角川日本地名大辞典 26京都府』角川書店 1991年。

『日本歴史地名体系27 京都市の地名』平凡社 1979年。

『平安京提要』角川書店 1994年。

註2 上村憲章『平安京左京三条四坊十町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2011年。

註3 家崎孝治『妙覚寺城跡—平安京左京三条三坊七町・烏丸御池遺跡—』古代文化調査会 2013年。

註4 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

註5 註3と同じ。

註6 『木村捷三郎収集古瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年。

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうしぼうじゅうごちょう・からすまおいけいせき
書名	平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡
副書名	麩屋町の調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	水谷明子
編集機関	古代文化調査会
所在地	〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
発行年月日	2015年4月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
へいあんきょう 平安京 さきょうさんじょう 左京三条 しぼう 四坊 じゅうごちょう 十五町・ からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとし 京都市 なかぎょうく 中京区 ふやちょう 麩屋町 おいけあが 御池上る かみはくさんちょう 上白山町	26100	1 464	35度 00分 40秒	135度 45分 56秒	2014.11.04 ～ 2015.01.10	300㎡	マンション 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京左京三条 四坊十五町・烏 丸御池遺跡	都城跡 集落跡	平安時代 ～ 江戸時代	池、土壇、柱穴、溝、堀	土師器、須恵器、瓦器、 国産陶磁器、輸入陶磁 器、瓦類、石製品、土 製品、金属製品、銭貨	平安時代中期 の建物、池跡

	Aランク 点数 (箱数)	内 訳	Bランク (箱数)	Cランク (箱数)	出土箱数 合計
点数及び箱数	259点 (8箱)	土師器181点、須恵器1点、緑釉陶器1点、 灰釉陶器1点、瓦器13点、青磁1点、白磁 5点、焼締4点、施釉陶器10点、染付5点、 軒瓦17点、瓦質製品3点、石製品8点、土 製品1点、金属製品2点、銭貨6点	110箱	0	118箱

版 圖



1 第1面全景（南西から）



2 第2面全景（南西から）



1 第3面全景（南西から）



2 第4面全景（南西から）



1 第1面調査区南西部（南西から）



2 溝29（北西から）



4 土壙39（北西から）



3 土壙43（西から）



5 建物基礎142と温石出土状況（北から）



1 第2面調査区南東部（南西から）



2 土壙130（東から）



4 堀175（東から）



3 土壙176骨出土状況（西から）



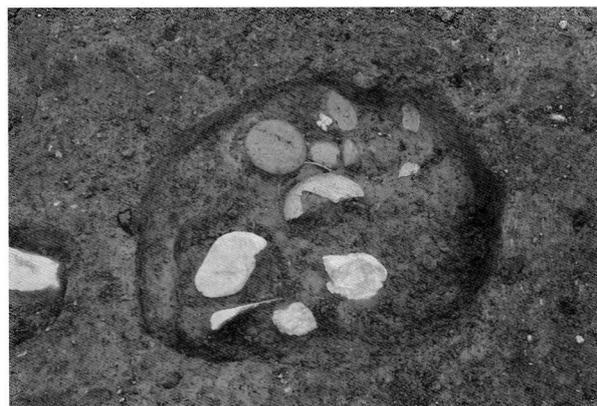
5 井戸56（東から）



1 土壙299・213 (南から)



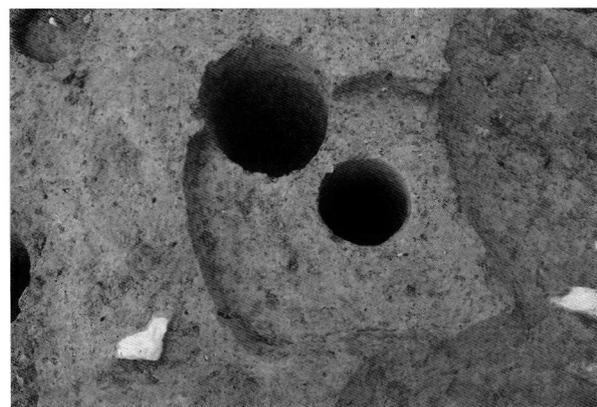
5 柱穴378 (南から)



2 土壙270 (南から)



6 土壙369 (南から)



3 柱穴358 (東から)



7 溝480 (北東から)



4 柱穴458 (東から)



8 池473 (北西から)



8



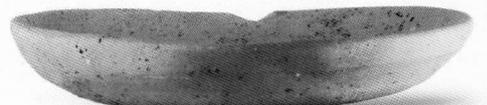
78



10



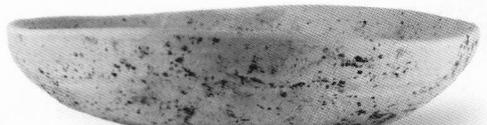
90



42



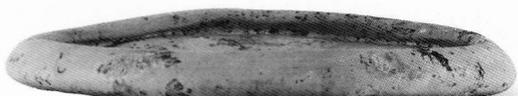
91



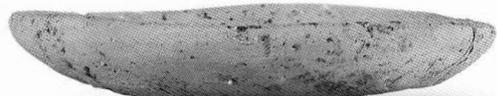
43



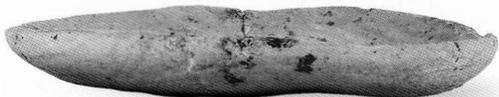
94



47



98



70



108



73



74

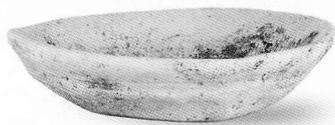


130

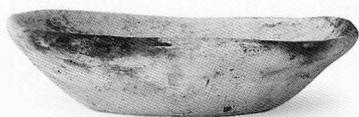
池473 (8・10)・土壙369 (42・43)・土壙447 (47)・土壙270 (70・73)・土壙300 (74・78)・
土壙177 (90・91・94・98)・土壙299 (108・130) 出土遺物



133



141



143



144



146



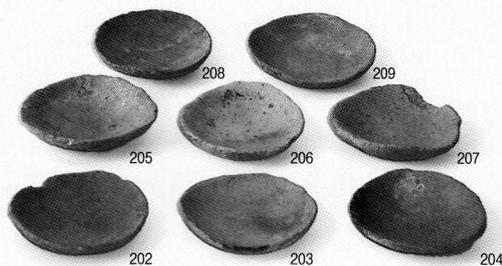
155



187



198



204

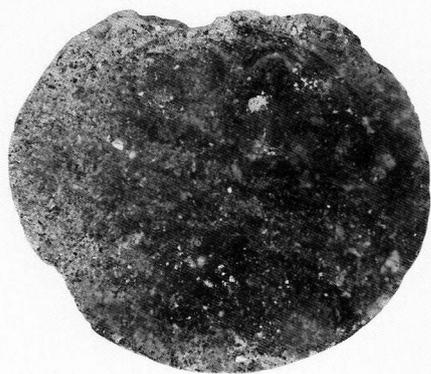


215



221

土壙213 (133) · 土壙244 (141 · 143 · 144 · 146 · 155) · 堀175 (187 · 198) · 土壙43 (202~209 · 215 · 221)
出土遺物



223



227



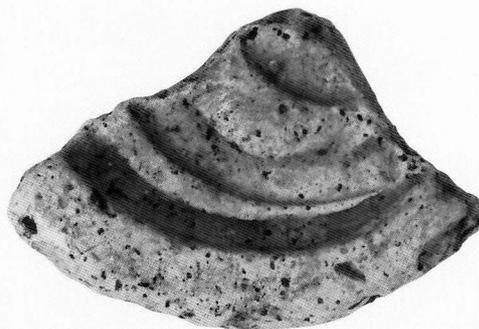
224



228



225



229



226



230

土壙232 (223)・土壙426 (224)・土壙337 (225・227)・土壙328 (226)・土壙287 (228)・土壙165 (229)・井戸94 (230) 出土遺物



231



235



232



236



233



237



234



238

土壙39 (231・237・238)・整地層② (232)・整地層② (233)・土壙300 (234)・井戸47 (235)・土壙125 (236)
出土遺物



239



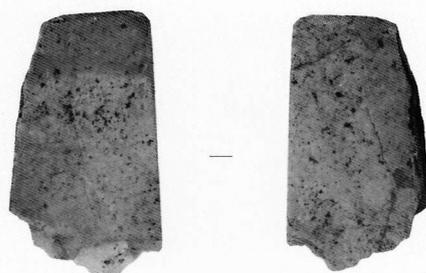
245



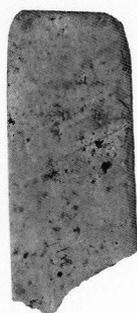
242

241

240



246



243



247



248



244



252



溝29 (239・247)・建物基礎142 (240~242)・土壙150 (243)・土壙26 (244)・井戸20 (245)・土壙130 (246)・土壙40 (248)・整地層② (252) 出土遺物

平安京左京三条四坊十五町・烏丸御池遺跡

—麩屋町の調査—

発行日 2015年4月28日
編集発行 古代文化調査会
住所 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中1丁目4番地125-1404
TEL (078)857-6368
印刷 真陽社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034